

特別史跡 三内丸山遺跡
年 報

— 22 —

平成30年度

青森県教育委員会

特別史跡 三内丸山遺跡
年 報

— 22 —

平成30年度

青森県教育委員会

序

特別史跡三内丸山遺跡は、縄文時代における集落の全体像や生活、自然環境等とその変遷を具体的に解明することができる、日本を代表する縄文遺跡と評価され、平成12年11月に特別史跡に指定されました。

また、平成15年5月には、三内丸山遺跡の出土品1,958点が重要文化財に指定されています。

青森県は、三内丸山遺跡を貴重な歴史的遺産として保存するとともに、遺跡の整備と一般公開を行っており、多くの方々に三内丸山遺跡を見学していただいています。

平成29年度は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録を見据え、その中核である三内丸山遺跡の更なる魅力づくりが求められていることから、県教育委員会では、平成30年2月に、有識者からの提言を踏まえ「三内丸山遺跡保存・活用の取組方針」を定めました。平成30年度からはこの方針の下、体験学習の充実や縄文のむらの景観復元に向けた検討、来場者サービスの充実、遺跡の効率的・効果的な管理運営体制の構築といった様々な取組を実施しているところです。より多くの見学者に縄文のむらに触れ、体感していただくことにより、遺跡や縄文文化の価値や魅力を国内外に広く発信して参りたいと考えております。

この年報は、平成29年度の三内丸山遺跡の整備、調査研究、活用事業の概要についてまとめたものであり、第41次発掘調査として実施した遺跡北端部の調査や縄文教室、季節ごとの縄文祭りなどについて掲載しています。刊行にあたり、三内丸山遺跡の保護・活用に御支援、ご指導を賜りました皆様に対し深く感謝申し上げますとともに、今後ともより一層の御尽力をお願い申し上げます。

平成31年3月

青森県教育委員会

教育長 和 嶋 延 寿



発掘調査現地説明会（第 41 次調査）



さんまるジョモリンピック

目 次

第1 平成29年度の事業について

1 整備状況	
(1) 平成29年度の整備の内容	1
2 調査研究	
(1) 三内丸山遺跡調査	1
(2) 関連遺跡調査	4
(3) 遺跡環境調査	4
(4) 三内丸山遺跡発掘調査委員会	5
(5) 特別研究推進事業	5
3 普及啓発	
(1) シンポジウム等	7
(2) 企画展及び最新情報展	7
(3) 三内丸山縄文教室	8
(4) 魅力発見！さんまる縄文体験事業	11
(5) 印刷物の発行	11
(6) 資料貸出	12
(7) 講演会等	12
(8) 縄文まつり	14

第2 平成29年度の見学者動向について	16
---------------------------	----

第3 研究ノート

「円筒土器文化圏における縄文時代前期末葉～中期初頭の土偶に関する一考察 —大木式土器文化圏の土偶との比較を中心に—」 折登 亮子（青森県埋蔵文化財調査センター）.....	19
---	----

第4 特別研究推進事業成果概要報告

1 個人研究	
「三内丸山遺跡の埋設土器に付加される人為的行為—二次整形痕を中心に—」 高木 麻里帆（さいたま市遺跡調査会）	33
2 共同研究	
「円筒土器文化における集落の実態をさぐる—時期差・地域差・存続期間の比較研究—」 青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室.....	41

第5 日誌抄録	49
---------------	----

参考資料

1 三内丸山遺跡の今後の保存・活用について	50
2 三内丸山遺跡の魅力づくりに関する報告書（概要版）	51
3 三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会設置要綱	53

第1 平成29年度の事業について

1 整備状況

(1) 平成29年度の整備の内容

公開遺構の整備

平成7年度以降の三内丸山遺跡の公開に伴い、劣化が進んだ箇所については修復・補充等の保存処理を継続的に行っている。平成29年度は大型竪穴建物跡露出展示の修繕を実施した。

同展示は、ベースがウレタン樹脂でできており、その表面をFRPで覆っている。さらに、その上に擬土(変性のエポキシ系合成樹脂に土壌を混ぜた、土に似せた土)を貼りつけて、建物跡の検出状況を再現している。

修繕は遺構範囲の約半分に対して実施した。



写真1 修繕前

作業内容については以下の通りである。

①劣化した擬土(写真1)を除去し、レプリカの支持体となるFRPベースを露出させる。

②FRPベースを補強するために、エポキシ系合成樹脂を塗布する。

③補強したFRPベースの上に、厚さ5mm～10mm程度の擬土を盛り付けて建物跡の検出状況を再現する(写真2)。なお、擬土は、遺跡周辺の土壌を主に使用し、必要に応じて真砂土や珪砂などを混合し、擬土の粒度分布を調製する。

平成30年度に残り半分の修繕を実施する予定である。



写真2 修繕後

2 調査研究

(1) 三内丸山遺跡調査

三内丸山遺跡の全体像や、集落構造の変遷の解明、保存・活用、整備計画の策定・推進のための資料収集を目的とした内容確認調査を継続して行っている。なお、遺跡の保存と解明を適切に進めるため、「三内丸山遺跡発掘調査計画」に基づ

き調査を進めており、国庫補助金受託事業である。

平成29年度は、第3期発掘調査計画の2年目にあたり、第41次発掘調査として昨年度に引き続き、遺跡北端部の調査を行った。

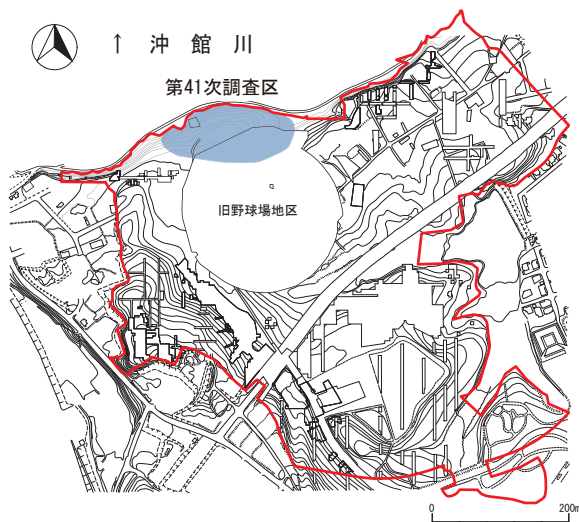
主な調査目的は下記のとおりである。

- ① 沢跡の形状や詳細な時期を把握する。
- ② 沢跡と「溜池状遺構」との関係性を把握する。
- ③ 「溜池状遺構」の東西の範囲を把握する。

・調査期間：平成29年 5月22日～10月27 日

・調査面積：約220㎡

・主な出土遺物：土器、石器、土製品・石製品等
段ボール箱60箱



第 41 次調査区の位置

今年度は、調査目的①について把握するため、前年度調査のHトレンチで確認された沢跡が位置する、南西方向から北東方向に向かい低くなる斜面に直交するようにK・L・Mトレンチを設定した。また調査目的②・③について把握するため、Nトレンチを設定した。遺構は新たに竪穴建物跡1棟、土坑5基、土器埋設遺構7基、焼土遺構2基、溝跡1条、ピット17基を確認した。

以下、調査目的ごとに成果の概要を記述する。

調査目的①については、K・M・Nトレンチで斜面の傾斜に沿って沢跡が確認された。断面はKトレンチで確認でき、沢跡①～③はいずれも緩やかに立ち上がる形状であった。堆積土はローム質土や砂質土、酸化鉄が互層となる水成堆積である。Kトレンチでは沢跡②の底面から中期後葉の土器が出土している。沢跡③は沢跡②を削って形成されているが、出土遺物に時期差がみられないこと



沢跡 Kトレンチ西壁土層断面

から、沢跡②と概ね同時期と考えられる。沢跡①は沢跡②に削られ、出土遺物は前期末葉～中期前葉となることから、北側で検出された盛土と同時期と考えられる。Lトレンチでは沢跡とみられる堆積土は確認されなかった。K・M・Nトレンチの調査により、沢跡は南西方向から北東方向に40m以上延びることが判明した。流水・滞水状況を調べるために珪藻分析を行ったところ、珪藻はほとんど検出されなかったことから、沢跡は常時滞水する状況ではなかったと考えられ、流水による開口と埋没を繰り返したことが想定される。



沢跡 Mトレンチ南壁土層断面

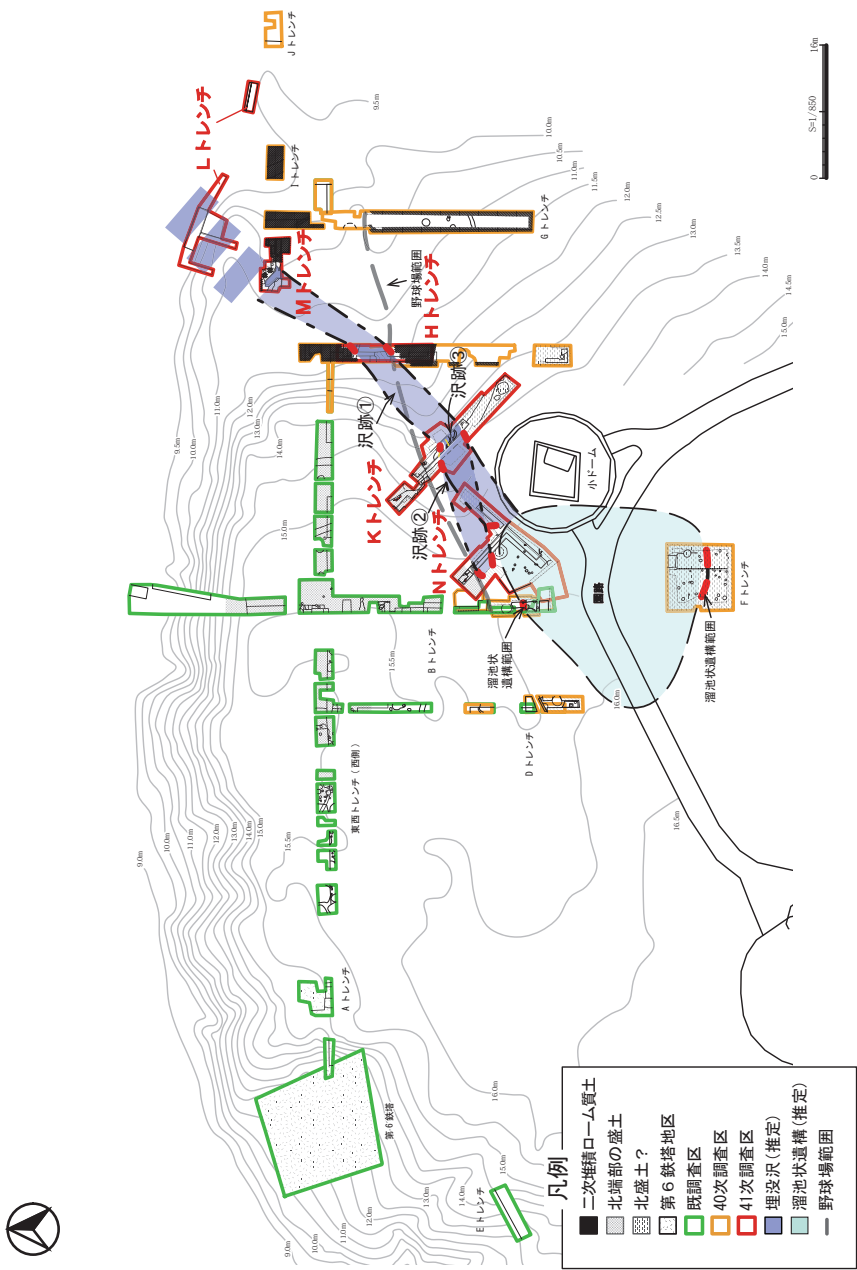
調査目的②については、Nトレンチ南西側で前期中葉～後葉の遺物が出土する砂質土や粘土、シルトなどが互層となる水成堆積層が確認された。前年度調査の「溜池状遺構」と様相が類似することから、その一部と考えられる。一方、Nトレンチ東側では沢跡の一部とみられる水成堆積層が

「溜池状遺構」を削る痕跡が確認された。このことから、少なくともNトレンチにおいては「溜池状遺構」と沢跡は同時性がないものと判断した。

調査目的③については、Nトレンチ南西側で「溜池状遺構」の一部が検出されたことから、東側が不明瞭であるものの、第40次調査の成果も踏まえて少なくとも東西・南北約25mに広がると考えられる。



「溜池状遺構」Nトレンチ南壁土層断面



第41次調査区遺構配置図

(2) 関連遺跡調査

この調査は、県内外の発掘調査事例や遺跡の整備・活用事例を調査し、それらの情報を得ることにより、三内丸山遺跡の学術的解明を進めていくとともに、遺跡間のネットワーク形成に向けた交流を目指すものである。

平成29年度は、第40次・第41次発掘調査で「溜池状遺構」、埋没沢が確認されたことや、今後の調査で有機質遺物が出土する可能性があることなどから、低湿地地点の調査事例や有機質遺物の出土事例、保管方法などについて調査を行った。

①加曽利貝塚（千葉市立加曽利貝塚博物館）

加曽利貝塚は千葉県千葉市に位置する縄文時代中期から晩期にかけての遺跡であり、豊富な動物骨・骨角器の他に、多数の人骨が確認されている。有機質遺物の展示・保管が行われている。加曽利貝塚検出の人骨はレプリカを作成して展示しているが、千葉市内の別遺跡から検出された人骨については、現地で地面ごと切り取って取り上げた状態で展示している。

②デーノタメ遺跡（北本市教育委員会）

デーノタメ遺跡は、埼玉県北本市に位置する縄文時代中期後半から後期にかけての遺跡である。低湿地部分が調査され、多数の有機質遺物や水場遺構が確認されている。

有機質遺物については、漆塗土器はタッパーに水を入れて保管している。木質の遺物はネットにに入れて水槽につけている。年2回ほど水替えを行っている。水場遺構の構築部材や木製品は、調査後早々に保存処理を行った。クルミなどの堅果類は、水洗い後、乾燥させて袋詰めにして保管している。

これらの遺物は日の光が入り込まないようにして、暗所に保管している。

③黒浜貝塚他（蓮田市教育委員会）

黒浜貝塚は、埼玉県蓮田市に位置する縄文時代前期の時期である。近隣には関山貝塚など著名な貝塚が分布し、蓮田市が当時の縄文海進はじめ縄文時代の環境・食生活などの解明に早くから注目されていた。

同市では、貝塚を主体とした、当時の食生活を展示している。動物骨は小型が多いので、拡大鏡を用いて展示している。骨・貝は安定しているので、特に温湿度管理は行っていない。

また同遺跡で史跡整備を行っており、情報交換も行った。

(3) 遺跡環境調査

三内丸山遺跡の長期的保護に向けて、その具体的な対応を検討するための基礎的な資料を得るため、覆屋の室温・温度等について定期的にデータの収集を行った。

(4) 三内丸山遺跡発掘調査委員会

三内丸山遺跡に関する学術的な解明や継続的な発掘調査計画検討のため、専門家による委員会を平成9年度から設置している。委員の任期は2年であり、年3回会議を開催している。

平成29年度は第11期の1年目となることから、平成29年5月15日付けで委員の委嘱を行った。



発掘調査委員による現地指導



発掘調査委員会

○委員長

小林 克（元秋田県埋蔵文化財センター所長）

○副委員長

玉田 芳英（独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部
長 兼 考古第一研究室長）

○委 員

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）
能城 修一（明治大学黒耀石研究センター
客員研究員）
樋泉 岳二（早稲田大学教育・総合科学学術院
非常勤講師）
根岸 洋（公立大学法人 国際教養大学
アジア地域研究連携機構 助教）
岡田 康博（青森県企画政策部理事
世界文化遺産登録推進室長
事務取扱）

○第1回発掘調査委員会（平成29年6月23日）

開催場所：縄文時遊館会議室（以下同じ）

検討内容：発掘調査について

特別研究推進事業について

総括報告書について

そ の 他：委嘱状交付・委員長・副委員長選任

○第2回発掘調査委員会（平成29年9月28日）

検討内容：発掘調査について

特別研究推進事業について

総括報告書について

○第3回発掘調査委員会（平成30年2月22日）

検討内容：発掘調査について

特別研究推進事業について

(5) 特別研究推進事業

本事業は遺跡の全体像解明と縄文文化の解明を進めるため、平成10年度から行っている。平成29年度は、総合的・学際的研究を展開し、より一層遺跡の全体像の解明と縄文文化に関する研究を進めるため、関連する研究を公募し、研究を委託した。

公募した研究テーマは以下の3項目である。

①三内丸山遺跡に関する研究

②円筒土器文化に関する研究

③三内丸山遺跡の保存・公開・活用に関する研究
（例えば遺構や出土品の展示方法、体験学習などに関する研究）

また、共同研究として平成29年度から3か年の計画で「円筒土器文化における集落の実態をさぐる一時期差・地域差・存続期間の比較研究」として、円筒土器文化における集落の詳細な比較研究を行っている。

ア 公募研究

「三内丸山遺跡の埋設土器に付加される人為的行為 ―二次整形痕を中心に―

高木麻里帆（埼玉大学大学院・当時、
現・さいたま市遺跡調査会）

イ 共同研究

「円筒土器文化における集落の実態をさぐる
―時期差・地域差・存続期間の比較研究―」
三内丸山遺跡保存活用推進室

三内丸山遺跡では平成24年から26年までの3か年で「円筒土器文化総合研究データベース作成」として、円筒土器文化に関する遺跡のデータベースなどを作成した。この研究により、基礎的なデータが整理され、さまざまな比較検討を行うことが可能になった。また、平成28・29年度には総括報告書として『三内丸山遺跡44』を刊行し、三内丸山遺跡や円筒土器文化の調査や研究の成果がまとめられた。このように、三内丸山遺跡や円筒土器文化について、現在的な視点で改めて研究が行われている状況である。

これを踏まえて、平成29年度からは遺構や遺物の比較検討を総合的に行い、円筒土器文化における集落の実態をさぐるための共同研究を行った。土器型式の時間軸のみではなく、さまざまな遺構や遺物の型式を整理し、より詳細な集落の時期差・地域差・存続期間などを検討する試みである。

○第1回研究会議

日時：平成29年8月26日（土）

内容：平成29年度から3か年で行う研究の方向性について事務局から説明を行い、青森県の埋蔵文化財担当者から意見を得た。また、対象とする遺跡や、地域ごとに変遷図を作成する対象遺構、遺物も選択し、円筒土器文化圏で比較検討するこ

とを確認した。

○第2回研究会議

日時：平成29年11月18日（土）

内容：事務局から三内丸山遺跡の竪穴建物跡を集成し、変遷図作成の方法を示した。建物跡の平面形、主柱穴の本数、炉の種類、特殊施設の有無などの主要な属性による分類を行った上で変遷図を作成し、それぞれの時期と地域の特徴を理解することとした。また、今後対象とする遺跡について選択基準などを議論し、意見を得た。当面は竪穴建物跡を中心に各地域でのデータ集成と変遷図の作成を行うことを確認した。小林克氏からは、「円筒土器分布圏での住居ないし炉をめぐる象徴性」と題して、秋田県の事例報告の発表後、意見交換が行われた。

○第3回研究会議

日時：平成30年2月3日（土）

内容：事務局から青森平野の拠点集落におけるそれぞれの変遷図が示した、青森平野の各集落の特徴が時期ごとに整理された。面積や炉の位置のデータはグラフ化され、各集落における竪穴建物跡の時期ごとの変化が視覚的にとらえられた。今後は円筒土器文化圏の各地域の変遷図作成を行うことを確認した。

3 普及啓発

(1) シンポジウム等

平成29年度は遺跡報告会をはじめとした以下の内容を行った。なお世界遺産の登録推進関連事業については、平成27年11月に青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室が新設され、そちらに移管されているが、当遺跡との関わりが深いため併せて掲載する。

ア 縄文フォーラム

日時：平成29年9月16日（土）15:30～17:00

会場：縄文時遊館（縄文シアター）

主催：縄文大祭典実行委員会

テーマ：「未来につなぐJOMON」

事例発表：浪越 朗

（だて噴火湾縄文まつり実行委員会
委員長）

川嶋 大史

（つがる縄文の会理事長）

上田 敏雄

（御所野遺跡を支える会会長）

川口 仁人

（大湯ストーンサークルボランティア
ガイドの会会長）

パネルディスカッション：

菊池 徹夫

（早稲田大学名誉教授）

岡田 康博

（青森県企画政策部理事

世界文化遺産登録推進室長事務取扱）

一町田 工

（一般社団法人三内丸山応援隊会長）

イ 三内丸山遺跡報告会

日時：平成29年3月10日（土）13:30～15:30

会場：縄文時遊館（縄文シアター）

主催：青森県教育委員会

内容：

第1部 発掘調査成果報告

「平成29年度三内丸山遺跡発掘調査成果報告」

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用
推進室

第2部 特別研究成果報告

「三内丸山遺跡の埋設土器に付加される人為的行
為—二次整形痕を中心に—」

高木 麻里帆（埼玉大学大学院・当時、
現・さいたま市遺跡調査会）

「円筒土器文化における集落の実態をさぐる一時
期差・地域差・存続期間の比較研究—」

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用
推進室



遺跡報告会のようす

(2) 企画展及び最新情報展

三内丸山遺跡への理解を促進するため、調査及び研究で明らかとなった最新情報を展示する企画展を開催した。

「磨製石斧の一生」

期間：平成29年9月16日（土）

～平成30年3月4日（日）

内容：三内丸山遺跡から出土した縄文時代の磨製

石斧を中心に展示した。材料の獲得、製作、使用、廃棄にいたるまでの様々な過程を、「一生」に見立て、「つくる」「つかう」「土地柄」「納める」に区分し、磨製石斧をとおして三内丸山遺跡で暮らした人々が、どのような活動をしていたかをわかりやすく紹介した。



企画展「磨製石斧の一生」

(3) 三内丸山縄文教室

三内丸山遺跡では、発掘調査から得られた成果をもとに、縄文時代の生活の一端を体験するさんまる縄文体験を、平成8年度から実施している。また、平成21年度から高校生以上の大人向けに、体験と講義をセットにしたさんまる縄文講座を実施していた。平成27年度からは、講義を中心としたさんまる縄文学講座を開催している。

ア 「さんまる縄文体験」

平成29年度は6月から10月までの火・土曜日に、1日コースを4回、2日コースを2回の計8回行った。できるだけ縄文時代と同じ材料を使い、より専門性を求めて、講師を依頼したものもある。また実施にあたっては、いずれも三内丸山応援隊の協力を得た。

【1日コース】

(ア) 「体験！発掘調査」

実施日：平成29年8月1日（火）

内容：発掘作業を体験し、目的や方法などについ

て理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：30名



「体験！発掘調査」のようす

(イ) 「土偶のレプリカを作ろう」

実施日：平成29年8月5日（土）

内容：遺跡から出土した土偶のレプリカを製作し、その意義や資料の取り扱い方について理解を深めた。

講師：堀江 武史 氏（府中工房）

参加者：15名

(ウ) 「ザリガニを釣って遺跡を守ろう！」

実施日：平成29年10月7日（土）

内容：縄文時代の水辺の環境について理解を深め、遺跡に生息する外来種のザリガニを釣って駆除した。

講師：新山久継氏（新城小学校）

参加者：13名



「ザリガニを釣って遺跡を守ろう！」のようす

(エ)「鹿の角で釣り針を作ろう」

実施日：平成29年10月14日(土)

内容：鹿角で釣り針を製作し、実際にニジマス釣りを、食料獲得方法について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：27名

【2日コース】

(ア)「遺跡を守ろう①！縄文の木を観察してプレートを作ろう」

実施日：平成29年6月7日(土)

内容：縄文時代に生息していた木を観察し、理解を深め、木のネームプレートを製作した。

講師：斎藤嘉次雄氏（青森県樹木医会）

参加者：4名

(イ)「遺跡を守ろう②！縄文の木にプレートをつけて、外来種の木を伐採しよう」

実施日：平成29年7月8日(土)

内容：縄文の木にネームプレートを取付けて、遺跡の中にある外来種のニセアカシアの木を石斧を使って伐採した。

講師：文化財保護課職員

参加者：4名

(ウ)「やってみよう！土器作り①」

実施日：平成29年7月15日(土)

内容：遺跡周辺で採取した粘土で土器と板状土偶を作り、製作方法などについて理解を深めた。

講師：誉田実氏（陸奥美窯）

参加者：17名

(エ)「やってみよう！土器作り②」

実施日：平成29年9月2日(土)

内容：①で作った土器と土偶を野焼きし、縄文時代の焼成技法などについて理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：16名



ギャラリートークのようす

イ 「さんまる縄文学講座」

平成29年度は、5月から11月までの土曜日に、縄文文化と三内丸山遺跡の調査研究成果を中心に、9回の講座を行った。

第1回「企画展 遺跡北端部の発掘

～第40次調査最新情報展～」

実施日：平成29年5月20日(土)

講師：文化財保護課職員

内容：企画展について詳しく解説し、展示前でギャラリートークを行った。

参加者：34名

第2回「民族例からみた土器作り」

実施日：平成29年6月10日(土)

講師：根岸 洋氏（国際教養大学）

内容：世界各地で今も行われている土器作りにはどのようなものがあり、何が読み取れるかについて



さんまる縄文学講座のようす

て講義を行った。

参加者：32 名

第3回「縄文時代のアスファルト」

実施日：平成 29 年 6 月 24 日（土）

講師：岡村 道雄氏（奈良文化財研究所 名誉研究員）

内容：縄文時代、接着などに使用されていたアスファルトの使用法や流通について講義を行った。

参加者：42 名

第4回「ここまで分かった三内丸山遺跡 ～土坑墓と道路跡～」

実施日：平成 29 年 7 月 22 日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：刊行された総括報告書をもとに、これまで三内丸山遺跡で検出された土坑墓と道路跡について講義を行った。

参加者：49 名

第5回「ここまで分かった三内丸山遺跡～盛土～」

実施日：平成 29 年 8 月 26 日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：刊行された総括報告書をもとに、これまで三内丸山遺跡で検出された盛土について講義を行った。

参加者：53 名

第6回「企画展 磨製石斧の一生」

実施日：平成 29 年 9 月 16 日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：企画展について詳しく解説し、展示前でギャラリートークを行った。

参加者：21 名



さんまる縄文学講座のようす

第7回「三内丸山遺跡に生息する植物」

実施日：平成 29 年 10 月 21 日（土）

講師：斎藤 嘉次雄氏（青森県樹木医会）

内容：三内丸山遺跡に生育する縄文時代の植物について、その種類や状態について野外で講義を行った。

参加者：32 名

第8回「ここまで分かった三内丸山遺跡～石器～」

実施日：平成 29 年 11 月 4 日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：刊行された総括報告書をもとに、これまで三内丸山遺跡から出土した石器についての講義を行った。

参加者：28 名

第9回「ここまで分かった三内丸山遺跡 ～竪穴建物跡～」

実施日：平成 29 年 11 月 18 日（土）

講師：永嶋 豊氏

（青森県埋蔵文化財調査センター）

内容：刊行された総括報告書をもとに、これまで三内丸山遺跡で検出された竪穴建物跡について講義を行った。

参加者：34 名

(4) 魅力発見！さんまる縄文体験事業

三内丸山遺跡の価値や魅力をさらに積極的に情報発信し、見学者の増加をめざすため、オリジナルボールペンを作成し、見学者に配布した。



オリジナルボールペン

- ・発掘現場公開・現場ガイドのお知らせ
- ・縄文時遊館増築中！
- ・縄文時遊館リニューアル！
- ・イベントのお知らせ
- ・三内丸山遺跡で縄文を学ぼう！
- ・三内丸山縄文春祭り

【第67号（平成29年12月18日発行）】

- ・平成29年度発掘調査の成果 第41次調査終了！！
- ・企画展「磨製石斧の一生」
- ・三内丸山遺跡魅力強化していきます！
- ・縄文時遊館増築中！
- ・イベント盛りだくさんの三内丸山遺跡
- ・見学者800万人達成
- ・さんまる縄文体験を行いました！！

(5) 印刷物の発行

ア 『特別史跡三内丸山遺跡年報』 21

A 4 81ページ 500部発行

平成28年度の事業、見学者の動向、研究ノート、特別研究推進事業成果概要報告、日誌抄録。

イ 『青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集 三内丸山遺跡44－総括報告書 第2分冊－』

A 4 257ページ 370部発行

平成4～6年度の三内丸山遺跡の発掘調査などをはじめとする既刊の調査報告等について総括した報告書の第2分冊。

ウ 「三内丸山通信」

A 3 両面刷り 各3000部発行

三内丸山遺跡の調査、イベント、トピックスなどの最新情報を掲載したニュースレター。

【第66号（平成29年7月8日発行）】

- ・発掘調査を見てみよう！～第41次発掘調査～
- ・企画展開催中 遺跡北端部の発掘 ー第40次調査情報展ー



三内丸山通信 第67号

(6) 資料貸出

平成29年度の出土遺物及びレプリカの貸し出し状況は以下のとおりである。

ア 青森県立郷土館 常設展示

平成29年4月1日～平成30年3月31日

土偶等34点

イ 北の縄文道民会議「縄文夏まつり」

平成29年6月29日～平成29年7月12日

土偶レプリカ1点

ウ 青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室

「あおもり J O M O N フェスタ」

(ア) 平成29年6月24日～平成29年6月25日

土偶レプリカ3点

(イ) 平成29年7月1日～平成29年7月2日

土偶レプリカ2点

(ウ) 平成29年7月8日～平成29年7月9日

土偶レプリカ2点

(エ) 平成29年7月15日～平成29年7月16日

土偶レプリカ3点

エ 青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室

「あおもり J O M O N フェスタ」

平成29年7月9日

土偶等40点

オ 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館企画展

「是川縄文ムラを観る・描く 一人と風と草木
のものがたり」

平成29年10月10日～平成29年12月9日

植物遺体1点

カ 松阪市文化財センター特別展「土偶と生活(く

らし)」

平成29年10月11日～平成29年12月20日

土偶等9点

キ 青森朝日放送株式会社 番組撮影

平成29年10月12日

石器レプリカ1点

ク 青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室

「新春知事対談収録」記念撮影

平成29年10月27日～平成29年10月31日

土偶レプリカ1点

ケ 青森県立郷土館 レプリカ製作

平成29年12月11日～平成29年12月28日

土偶レプリカ1点

コ 北海道環境生活部文化・スポーツ局文化振興

課縄文世界遺産推進室「縄文雪まつり」

平成30年2月1日～平成30年2月14日

土偶レプリカ2点

(7) 講演会等

三内丸山遺跡に対する理解や関心を深めてもらうため、主催者の依頼に応じた講義を行った。平成29年度に行った講義等は、以下の通りである。

5月15日

出前トーク「三内丸山遺跡ってどんな遺跡？」

講師：文化財保護課職員

場所：弘前市立西小学校



出前トークのようす

8月3日

「郷土の文化を学ぶ」

平成29年度初任者研修（小・中学校）「教職一般
研修講座」講義

講師：文化財保護課職員

場所：青森県総合学校教育センター

11月17日

平成29年度「教員力アップ！学校・家庭・地域
連携講座」

講師：文化財保護課職員

場所：青森県総合社会教育センター

○縄文“体感”世界遺産講座

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値や魅力
を次の世代に引き継ぐことを目的とし、講座を
行った。

三内丸山遺跡保存活用推進室も協力し、世界文
化遺産登録に向けた取り組みを進めている。

4月11日

むつ市立第二田名部小学校

受講者：小学6年生

講師：世界文化遺産登録推進室職員

場所：むつ市立第二田名部小学校

4月19日

青森市立浪打小学校

受講者：小学6年生

講師：世界文化遺産登録推進室室長・職員

場所：青森市立浪打小学校

5月26日

弘前市立和徳小学校

受講者：小学6年生

講師：世界文化遺産登録推進室室長・職員

場所：弘前市立和徳小学校

5月26日

弘前市立大成小学校

受講者：小学6年生

講師：世界文化遺産登録推進室室長・職員

場所：弘前市立大成小学校

6月6日

八戸市立小中野小学校

受講者：小学6年生

講師：県教育長・世界文化遺産登録推進室室長

場所：八戸市立小中野小学校

6月12日

弘前市立岩木小学校

受講者：小学6年生

講師：世界文化遺産登録推進室職員

場所：弘前市立岩木小学校

7月13日

つがる市長寿大学

受講者：つがる市長寿大学受講生

講師：早稲田大学名誉教授・縄文遺跡群世界遺
産登録推進専門家委員会委員長 菊池徹夫氏

場所：つがる市生涯学習センター

7月19日

遺跡ガイド養成講座

受講者：県立木造高等学校生徒等

講師：世界文化遺産登録推進室室長

場所：つがる市生涯学習センター

7月19日

弘前市立東小学校

受講者：小学6年生

講師：弘前市教育委員会 岩井 浩介 係長

場所：弘前市立東小学校

9月11日

八戸学院野辺地西高等学校

受講者：高校1年生

講師：世界文化遺産登録推進室職員

場所：八戸学院野辺地西高等学校

11月11日

むつ市文化財ボランティアの会

受講者：一般市民

講師：むつ市教育委員会 森田 賢司 主事

世界文化遺産登録推進室職員

場所：むつ市北の防人大湊・安渡館

2月15日

青森県立尾上総合高等学校

受講者：生徒

講師：世界文化遺産登録推進室職員

場所：青森県立尾上総合高等学校

(8) 縄文まつり

平成29年度に行った内容は以下のとおりである。

ア 縄文春祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課



縄文春祭り 発掘ひろば

実施日：平成29年5月3日～5月5日

内容：クイズラリー、さんまるクエスト～春の三内丸山ムラを探検しよう！～、津軽三味線ライブ、縄文ファッションで記念撮影！、縄文ファッションで記念撮影、春の遺跡のフォトギャラリー、#（ハッシュタグ）三内丸山遺跡キャンペーン、発掘ひろば、縄文ものづくり体験、縄文生活体験などを開催した。

イ 縄文夏祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成29年8月11日・12日

内容：クイズラリー、縄文パノラマビュー！！、縄文ファッションで記念撮影！、#（ハッシュタグ）三内丸山遺跡キャンペーン、発掘ひろば、さんまるスペシャルガイドツアー、夏休み体験、縄文ハンター、縄文ものづくり体験、縄文生活体験などを開催した。



縄文夏祭り さんまるスペシャルガイドツアー

ウ 縄文大祭典

主催：縄文大祭典実行委員会

実施日：平成29年9月16日

内容：発掘調査現地説明会、クイズラリー、縄文パノラマビュー！！、縄文ワークショップ、こども縄文ワークショップ、縄文フォーラム、縄文コンサート、縄文ものづくり体験、樹木匠と散策する三内丸山遺跡、縄文生活体験などを開催した。

エ 縄文秋祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成29年9月17日・18日

内容：発掘調査現地説明会、クイズラリー、縄文ファッションで記念撮影！、縄文パノラマビュー！！、#（ハッシュタグ）三内丸山遺跡キャンペーン、縄文ハンター、縄文ワークショップ「土器を食べちゃえ！“ドッキー”づくり体験」、「ちょきちょき縄文切り絵体験」、縄文ものづくり体験、縄文生活体験などを開催した。

オ さんまるジョモリンピックwithご当地キャラ

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成29年9月17日

内容：縄文人の生活にちなんだ競技大会（しっ狩りねらって！弓矢・やり投げ対決、ドキ土器！水運びリレー、ビッ栗！木の实入れ）、アトラクション（ご当地キャラダービー、えものさんをみつけた！）を開催した。

カ ギネス世界記録に挑戦！ー世界最大の考古学授業ー

主催：青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室

実施日：平成29年11月5日

内容：300人の参加者が、三内丸山遺跡の世界に誇れる価値や、世界遺産登録活動の意義を学ぶ考古学授業を30分間実施し、「一つの会場で考古学の授業を聴講する人数の最高記録」に挑戦し、達成した。



ギネス世界記録挑戦中

キ 縄文冬祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成30年2月10日・11日

内容：クイズラリー、雪中宝さがし、大型すべり台、雪だるま広場、#（ハッシュタグ）三内丸山遺跡キャンペーン、発掘ひろば一冬ver.一、縄文ハンター、ご当地キャラグリーティング、スコップ三味線ライブ、縄文スノーサバイバル、縄文ものづくり体験、縄文生活体験、たき火ひろばなどを開催した。



縄文冬祭り 縄文スノーサバイバル

第2 平成29年度の見学者動向について

1 遺跡見学者数及びさんまるミュージアム見学者数

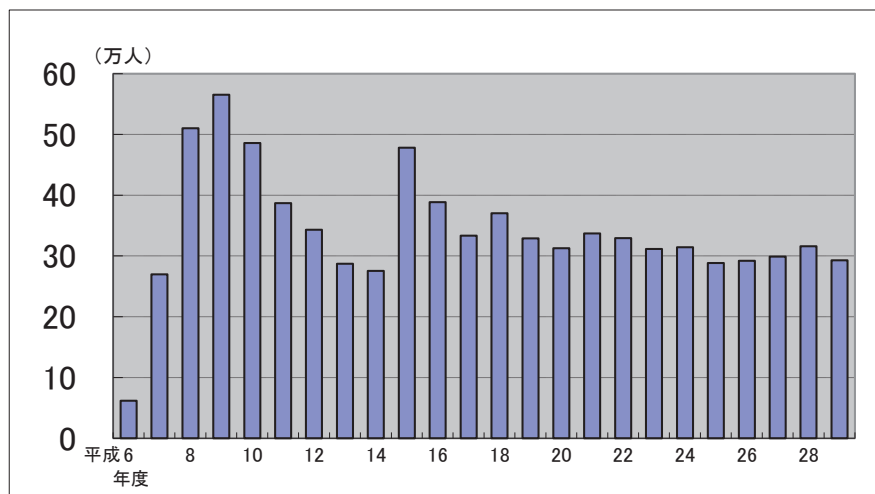
平成29年度の遺跡見学者数は292,833人、うち「さんまるミュージアム」（以下ミュージアム）の見学者数は188,016人である。

月ごとの遺跡見学者数は多い順から8月、5月、9月となっている。これはねぶた祭り、縄文大祭典等のイベントによる観光客の増加が要因であると考えられる。また、12月～3月の見学者数については例年同様夏季に比べ減少がみられる。

ミュージアムの見学者数は、遺跡見学者数の

64.2%である。冬期間（1～3月）におけるミュージアムの見学者割合が73.0%と高く、夏期間（7～9月）における割合が59.9%と少ない。冬期間割合が高い理由としては、個人見学者の割合が高く、一般団体見学者に比べ時間に余裕があるためと推測される。また、ミュージアムは冬季であっても天候に左右されず見学する人も多いためと考えられる。

年 度	見学者数	前年比(%)
平成6年度	61,807	—
7年度	269,597	436.2
8年度	510,337	189.3
9年度	565,376	110.8
10年度	485,917	85.9
11年度	387,021	79.6
12年度	343,050	88.6
13年度	287,182	83.7
14年度	275,551	95.9
15年度	478,165	173.5
16年度	388,652	81.3
17年度	333,583	85.8
18年度	370,447	111.1
19年度	328,815	88.8
20年度	312,964	95.2
21年度	337,035	107.7
22年度	329,374	97.7
23年度	311,513	94.6
24年度	314,235	100.9
25年度	288,617	91.8
26年度	292,267	101.3
27年度	299,098	102.3
28年度	316,177	105.7
29年度	292,833	92.6
計	7,886,780	

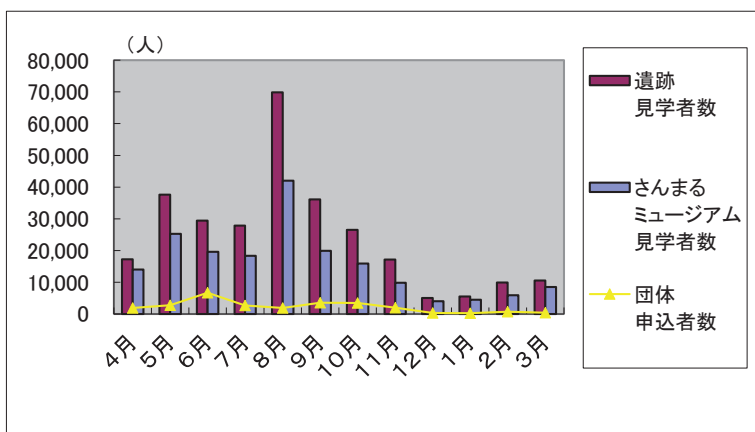


グラフ1 平成29年度までの遺跡見学者数

表1 平成29年度までの遺跡見学者数

月	遺跡 見学者数	さんまる ミュージアム	団体 申込者数
4月	17,282	14,001	1,912
5月	37,582	25,238	2,810
6月	29,431	19,631	6,708
7月	27,861	18,354	2,721
8月	69,871	42,004	1,906
9月	36,128	19,949	3,530
10月	26,495	15,939	3,488
11月	17,167	9,863	2,021
12月	5,026	4,046	350
1月	5,516	4,515	267
2月	9,910	5,924	714
3月	10,564	8,552	385
計	292,833	188,016	26,812

表2 平成29年度見学者数



グラフ2 平成29年度見学者数

(2) 団体見学者の傾向

団体の見学者数は27,276人で、見学者全体に占める割合は9.3%である。このうち県内の利用は32.0%で、一般団体の利用が多く、また、県外からの利用は68.0%で、こちらも一般団体の利用が多い。団体見学者が多いのは6・9・10月で、5～6月は修学旅行などの学校見学者が62.7%を占める。9～10月は学校見学者は少なく一般見学者が多い。8月は遺跡全体の見学者が最も多いが、団体見学者の割合は少ない。これは、

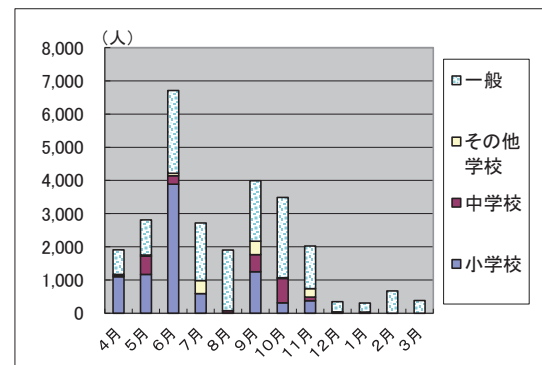
ねぶた期間中は見学者が集中するため、定時ガイドを増やすことで対応し、団体予約を受け付けていないためである。また、冬季の団体見学者は少なく、学校団体の見学はほとんどない。

修学旅行での利用は、小学校が52.9%を占める。地域別では北海道が多く、修学旅行生全体の53.3%を占める。その他の地域の利用割合は、昨年度と比較すると関東地域の学校が減少している。

また、県内の学校団体では、小学校に比べて中学校の利用が少ない。

月	小学校		中学校		その他学校		一般		総計	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
4月	26	1,099	1	30	2	43	40	740	69	1,912
5月	28	1,170	7	550	1	36	48	1,054	84	2,810
6月	80	3,888	2	253	3	78	100	2,489	185	6,708
7月	12	590	0	0	5	393	78	1,738	95	2,721
8月	1	7	2	69	0	0	77	1,830	80	1,906
9月	21	1,249	5	515	7	407	83	1,820	116	3,991
10月	8	314	5	737	2	22	106	2,415	121	3,488
11月	10	376	1	115	4	253	58	1,280	73	2,024
12月	1	40	0	0	1	5	12	305	14	350
1月	0	0	0	0	1	40	12	267	13	307
2月	0	0	0	0	0	0	21	674	21	674
3月	0	0	0	0	0	0	15	385	15	385
計	187	8,733	23	2,269	26	1,277	650	14,997	886	27,276

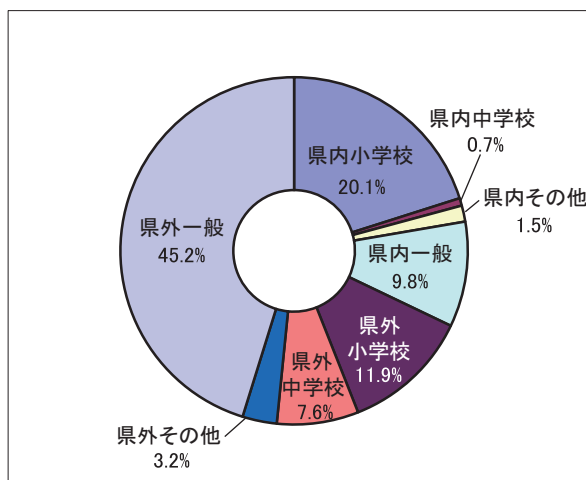
表3 平成29年度団体見学者数



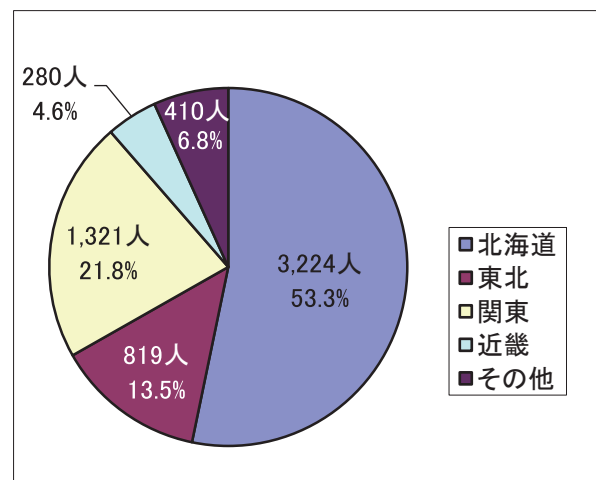
グラフ3 平成29年度団体見学者数

区分	小学校		中学校		その他学校		一般		総計	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
県内	120	5,481	4	199	13	404	105	2,671	242	8,755
県外	67	3,252	19	2,070	13	873	545	12,326	644	18,521
計	187	8,733	23	2,269	26	1,277	650	14,997	886	27,276

表4 平成29年度団体見学者の地域別見学者数



グラフ4 平成29年度団体見学者数の割合



グラフ5 平成29年度修学旅行生の地域別割合

平成29年度の学校団体の見学者数は、県外で6,195人、県内で6,084人となっている。

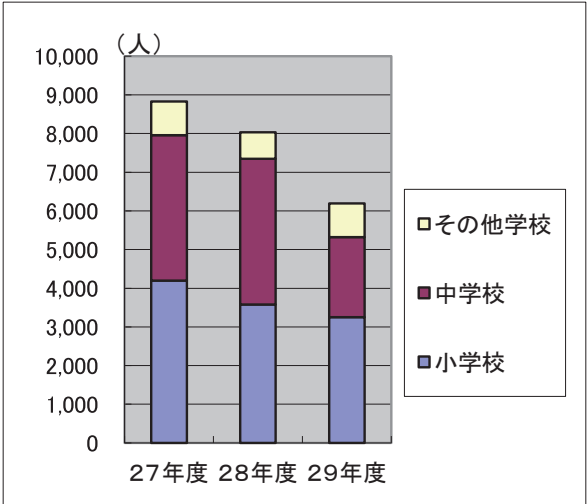
県外の学校の見学者数は、昨年度と比較すると小学校・その他学校で減少し、その中学校で増加している。

また、県内学校については、昨年度と比較すると中学校で増加し、小学校・その他校で減少して

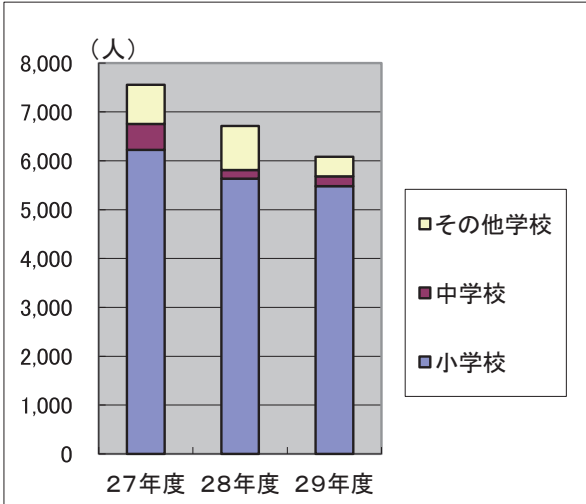
いる。

註) カウント方法、カウント場所は次のとおりである。

- ・遺跡・ミュージアム見学者数：縄文時遊館入口でセンサーによりカウント
- ・団体見学者数：事前に見学申込のあった団体見学者で三内丸山応援隊がカウント



グラフ 6 県外学校の見学者数



グラフ 7 県内学校の見学者数

年度	小学校		中学校		その他学校		総計		前年比(%)	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
27年度	83	4,195	40	3,765	7	869	130	8,829	95.6	85.6
28年度	72	3,576	31	3,771	10	682	113	8,029	86.9	90.9
29年度	67	3,252	19	2,070	13	873	99	6,195	87.6	77.2

表 5 県外学校の見学者数

年度	小学校		中学校		その他学校		総計		前年比(%)	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
27年度	122	6,223	9	529	12	805	143	7,557	97.9	110.8
28年度	123	5,637	5	173	22	902	150	6,712	104.9	88.8
29年度	120	5,481	4	199	13	404	137	6,084	91.3	90.6

表 6 県内学校の見学者数

第3 研究ノート

円筒土器文化圏における縄文時代前期末葉～中期初頭の土偶に関する一考察 —大木式土器文化圏の土偶との比較を中心に—

折登 亮子（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

円筒土器は縄文時代前期中葉～中期中葉、北海道南部～東北地方北部に分布する土器型式である。この円筒土器文化圏では、縄文時代前期末葉～中期初頭に土偶が多く作られるようになり、以降三内丸山遺跡周辺を中心として爆発的に増加する（註1）。一方、同時期に東北地方中～南部には大木式土器が分布する。大木式土器文化圏の太平洋側では、北上川下流域を中心に前期前葉から土偶が出土し、前期中葉～後葉に増加する。前期末葉～中期前葉には北上川上～中流域でいわゆる「板状〇脚土偶」（稲野 1998）がみられるようになる。

筆者は平成 28 年に大木式土器文化圏の板状〇脚土偶を実見する機会を得た。その際に、円筒土器文化圏の土偶とは脚部の形は異なるが、文様やそのモチーフにおいて共通点があるように思われ、その共通性から、円筒土器文化圏で前期末葉～中期初頭に土偶が急増することには、大木式土器文化圏の影響があるのではないかと考えた。

今回は縄文時代前期末葉～中期初頭の両文化圏の土偶の比較を行い共通点・相違点をみていくことで、両文化圏にどのような影響関係があったかを考えたい。

2 研究史

円筒土器・大木式土器文化の土偶に関する研究のすべてを確認できていないため、ここでは概略的に触れることとする（註2）。

円筒土器文化の土偶については、山内清男が是川一王寺遺跡で土偶が出土したことを報告し（山

内 1934）、その土偶は江坂輝弥により円筒下層c式と伴出したとされた（江坂 1966）。その後は石神遺跡など発掘調査での出土事例の増加もあり、江坂輝弥、村越潔、鈴木克彦、三宅徹也により土偶の変遷案が提示された（江坂 1966、村越 1974、鈴木 1985 ほか、三宅 1990）。その中で村越は、岩偶の存在を重視し、円筒土器文化は本来土偶をもたない文化だった可能性を述べている。1992～4 年には三内丸山遺跡の発掘調査において土偶が多量に出土した。小笠原雅行は三内丸山遺跡の土偶の変遷を示したほか（小笠原 2002・2017）、円筒土器文化圏の土偶についてもまとめた（小笠原 2018）。

大木式土器文化の土偶については、昭和 40 年頃に興野義一が糠塚貝塚の発掘調査・採集を行い土偶が 100 点以上確認された（佐藤 2012）。小笠原好彦はこの資料を中心に宮城県内の土偶の編年を行った（小笠原 1984）。その後、出土資料の増加により藤沼邦彦、近藤悟・阿部博志によって編年案が提示された（藤沼 1992 ほか、近藤・阿部 1994）。北上川中流域の岩手県内の出土資料についても、斎藤尚巳、稲野裕介・金子昭彦・熊谷常正・中村良幸により紹介され（斎藤 1985、稲野ほか 1992）、熊谷常正により編年が行われた（熊谷 1997）。その後、稲野裕介は板状土偶のうち前期末葉～中期初頭に位置付けられるものを、それ以前の板状土偶と区別して「板状〇脚土偶」と呼称した（稲野 1998）。金子昭彦は「板状〇脚土偶」を前期前葉～中期前葉に拡大して編年を行い、後続する中期中葉の土偶についても編年を行った（金子 2012・2014）。

円筒土器文化圏における前期末葉～中期初頭の土偶の盛行については、これまで大木式土器文化圏の土偶の影響と、円筒土器文化圏に前期からみられる岩偶の影響が指摘されている。大木式土器文化圏との関連性では、鈴木克彦が土偶の文様や板状O脚土偶の出土事例から、大木式土器文化の影響を受けて発生したものであると考察している（鈴木 1985 ほか）。岩偶との関連性については、小笠原雅行が円筒土器文化圏の土偶の形状が岩偶に類似することから、大木式土器文化圏からの受容のみで土偶が発生したのでなく、岩偶からの系譜が認められることを指摘している（小笠原 2018 ほか）。

3 分析対象と方法

分析する土偶は、細沈線・沈線・竹管文などが施されている縄文時代前期末葉～中期初頭とされたもの（円筒下層 d～円筒上層 a 式、大木 6 式～7 式）を対象とした（註 3）。土偶の一括資料は少ないため、ここでは対象遺跡から出土した該当のものはすべて分析対象とした。

対象遺跡は、対象時期の土偶がまとまって出土している遺跡から選択した。円筒土器文化圏では、三内丸山遺跡、笹ノ沢（3）遺跡、大木式土器文化圏では、塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡、大館町遺跡、滝ノ沢遺跡、鳩岡崎遺跡を選択した（註 4）（図 1）。

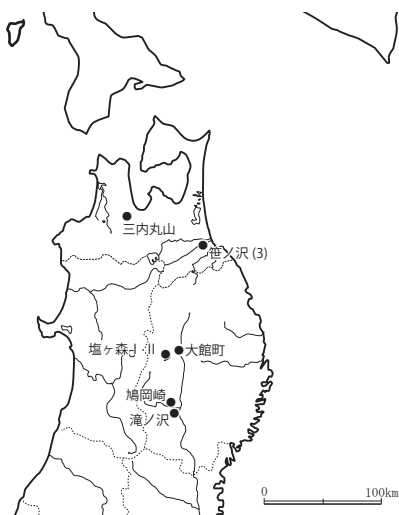


図 1 分析対象遺跡

分析は、対象資料の形態・文様の観察とカウントを行った。表裏は基本的に実測図に拠って決定した（註 5）。

形態は土偶の形から代表的なものを設定して以下のように分類した（図 2）。

①腕の形態

Y 字：腕が上向きのもの 十字：腕が横向きのもの
異形：前二者に分類できないもの

②脚の形態

O 脚：二脚で脚の形が整った O 字を呈するもの
二脚：二脚であるが脚の形が O 字とならないもの
一脚：円形・台形・棒状など二脚表現のないもの

文様は部位ごとに、代表的なモチーフを設定して以下のように分類した（図 2）（註 6）。

③頭部（表）

貫通孔：頭部に複数の貫通孔が施されるもの
貼付：頭部に複数の小型の粘土粒が貼付されるもの

④頭部（裏）

縦線：縦に沈線が施されるもの
縦線＋渦巻：縦線に渦巻モチーフが追加されるもの
斜線：斜位に沈線が施されるもの
肋骨状（鋸歯状）：背面に施された肋骨状（鋸歯状）モチーフが頭部にも施されているもの
貼付：縦に垂下する粘土紐が貼付されるもの

⑤顔表現

目円形：目と考えられる沈線・窪み等が円形に施されるもの
眉・鼻貼付：眉・鼻状に粘土紐が貼付されるもの
眉沈線：眉状に沈線が施されるもの
口～胸部凹部：口～胸部に凹部が作出されるもの
口～胸部凹部＋貫通孔：前述の凹部＋貫通孔が施されるもの
口～胸部貫通孔：口～胸部に貫通孔が施されるもの

⑥胸表現

貼付：胸部に二つの粘土瘤が貼付されるもの
貼付＋貫通孔：貼付の直上・直下に貫通孔が施されるもの
貫通孔：胸部に二か所貫通孔が施されるもの

⑦臍表現

貼付：腹部に一つの粘土瘤が貼付されるもの
貫通孔：腹部に貫通孔が施されるもの
凹部：腹部に凹部が作出されるもの

⑧正中線

凹部：背面に凹部が縦に正中線状に施されるもの
沈線：背面に沈線が縦に正中線状に施されるもの
刺突：背面に刺突が縦に正中線状に施されるもの
無文：背面に文様があり、正中線部分を無文として表現しているもの
なし：背面が無文など正中線の表現がないもの

⑨⑩腕部（表・裏）（貫通孔が施されるものを含む）

横線：腕部に沿うように横位に沈線が施されるもの

形態

①腕の形態



Y字

十字

②脚の形態



一脚

文様

③頭部 (表)



貫通孔

貼付

④頭部 (裏)



縦線

縦線+渦巻

斜線

肋骨状 (鋸歯状)

貼付

⑤顔表現



目 円形

眉・鼻 貼付

眉 沈線

⑥胸表現



口~胸部 凹部

口~胸部 凹部+貫通孔

貫通孔

⑦胸表現



貼付

貼付+貫通孔

貫通孔

⑧正中線



貼付

貫通孔

凹部

凹部

沈線

刺突

無文

円筒土器文化圏

⑨腕部 (表)



横線

斜線

横線+渦巻

渦巻

⑩腕部 (裏)



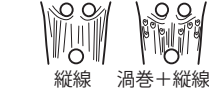
横線

斜線

横線+渦巻

渦巻

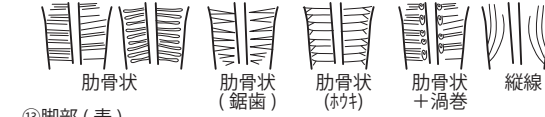
⑪胴部 (表)



縦線

渦巻+縦線

⑫胴部 (裏)



肋骨状

肋骨状 (鋸歯)

肋骨状 (杓)

肋骨状+渦巻

縦線

⑬脚部 (表)



斜線

斜線②



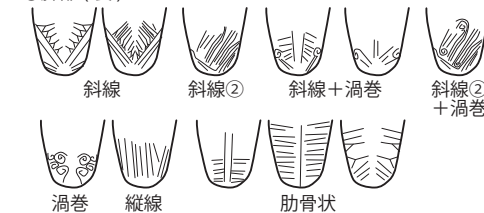
斜線+渦巻

斜線②+渦巻

渦巻

縦線

⑭脚部 (裏)



斜線

斜線②

斜線+渦巻

斜線②+渦巻

渦巻

縦線

肋骨状

大木式土器文化圏

⑨腕部 (表)



横線

斜線

横線+渦巻

貫通孔

⑩腕部 (裏)



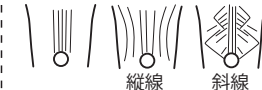
横線

斜線

横線+渦巻

肋骨状 (鋸歯)

⑪胴部 (表)



縦線

斜線

⑫胴部 (裏)



肋骨状

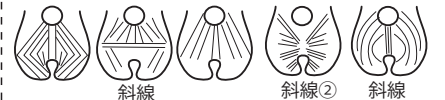
肋骨状 (鋸歯)

肋骨状+渦巻

肋骨状 (鋸歯)+渦巻

縦線

⑬脚部 (表)



斜線

斜線②

斜線 (弧状)



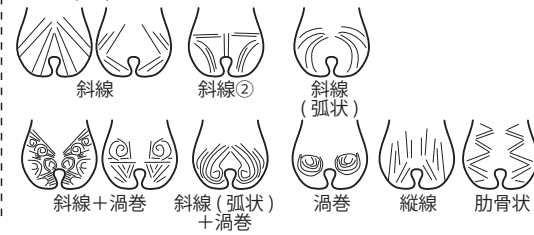
斜線+渦巻

斜線 (弧状)+渦巻

渦巻

縦線

⑭脚部 (裏)



斜線

斜線②

斜線 (弧状)

斜線+渦巻

斜線 (弧状)+渦巻

渦巻

縦線

肋骨状

図2 形態と文様の模式図

(鋸歯状の横線を含む)

斜線：腕部に対して斜位に沈線が施されるもの

横線＋渦巻：横線に加え渦巻状に沈線が施されるもの

渦巻：渦巻モチーフのみが施されるもの

(横線＋渦巻の一部である可能性もある)

肋骨状（鋸歯状）：背面の肋骨状（鋸歯状）文様が腕部に引き続き施されるもの

貫通孔：腕の中央部や末端部に貫通孔が施されるもの

⑪胴部（表）

縦線：胴部に沿うように縦位に沈線が施されるもの

縦線＋渦巻：縦線の端部に渦巻状に沈線が施されるもの

斜線：縦線に加え鋸歯状・菱形状の沈線が施されるもの

⑫胴部（裏）

肋骨状：直線もしくはコ字・U字を組み合わせて肋骨状に沈線が施されるもの

肋骨状（鋸歯）：鋸歯状モチーフを組み合わせて肋骨状に沈線が施されるもの

肋骨状（ホウキ）：ホウキ状モチーフを組み合わせて肋骨状に沈線が施されるもの

肋骨状＋渦巻：肋骨状文様に渦巻状の沈線が施されるもの

肋骨状（鋸歯）＋渦巻：肋骨状（鋸歯）文様に渦巻状の沈線が施されるもの

渦巻：渦巻状の沈線が施されるもの

(肋骨状（鋸歯状）＋渦巻の一部と考えられる)

縦線：胴部に沿うように縦位～斜位に沈線が施されるもの

⑬⑭脚部（表・裏）

斜線：腹部から放射状や三角形に沈線が施されるものや、脚部に区画となる横位の沈線が施されそこから放射状に沈線が施されるもの

斜線②：前述の斜線と異なりランダムな斜線のもの

斜線（弧状）：脚部に沿って斜線～弧状に沈線が施されるもの

斜線＋渦巻：斜線に加え渦巻状の沈線が施されるもの

斜線②＋渦巻：斜線②に加え渦巻状の沈線が施されるもの

斜線（弧状）＋渦巻：斜線（弧状）に加え渦巻状の沈線が施されるもの

渦巻：渦巻状の沈線のみが施されるもの

縦線：胴部に沿うように縦位の沈線が施されるもの

肋骨状（鋸歯・ホウキ含む）：背面の肋骨状文様が脚部裏面に引き続き施されるもの

4 土偶の属性分類（表1）

①三内丸山遺跡

三内丸山遺跡は青森県青森市、沖館川南側の段丘上に位置する縄文時代前期～中期、平安時代の複合遺跡である。特に縄文時代前期～中期の拠点集落であり、土偶は2000点以上出土している（小笠原2017）。第6鉄塔地区・南盛土・西盛土・北盛土出土土偶を分析対象とした（註7）。観察

したものは合計で116点である。

腕形はY字・脚形は一脚が多数を占める。頭部は貫通孔があるものが少数見られ、裏面には縦線モチーフが施される。頭部23個体のうち、顔表現があるものが一定数あり、目や眉の表現があるものが8個体、口部に凹部をもつものが9個体確認される。胸部・臍部は共に貼付で表現されるものが大多数を占める。背面の正中線は凹部や沈線で強調されるものが多い。腕部は表裏共に横線が最も多く、次いで横線＋渦巻が多いが無文も一定数ある。胴部表は縦線が施されるものが圧倒的に多く、渦巻が加えられるものもある。胴部裏は肋骨状が大半を占めるが、鋸歯状のものは少ない。脚部は表裏共に斜線や斜線＋渦巻が多いが、脚部裏面には背面の肋骨状モチーフがそのまま垂下するものが一定数見られる。

②笹ノ沢（3）遺跡

笹ノ沢（3）遺跡は青森県八戸市に位置し、ほぼ中期初頭の円筒上層a式期に限られる集落跡である。遺構内外出土すべてを分析対象としたが多くの遺構外出土で、観察したものは合計で51点である。頭部が累計2点のみしか確認されておらず偏りが指摘されている（青森県教委2004）。

腕形がわかるものはほとんどなく、脚形は一脚が多数を占める。胸部・臍部は共に貼付が多くみられる。正中線は沈線で表されるものと無文のものがある。腕は表裏共に横線が多い。胴表には縦線がほぼすべてに施される。胴部裏には肋骨状文様が施されるが、ホウキ状モチーフによるものが主体である。脚部は表裏共に斜線が多い。

③大館町遺跡

大館町遺跡は岩手県盛岡市、雫石川北岸の台地上に位置する大館遺跡群の一つである。縄文中期中葉～後半を中心とする大規模な集落跡遺跡であり、調査区南端～西端部には前期末葉～中期中葉

の大規模な遺物包含層が形成されている（註8）。岩手大学考古学研究会による調査区、盛岡市教育委員会による調査の遺構内外出土のものを分析対象とした。観察したものは合計で48点である。

腕形はY字が多く、脚形は二脚が多い。一脚のものも多いが、新しい時期のものが含まれている可能性もある。頭部に貫通孔をもつものも多く、頭部の裏面は無文、次いで縦線が多い。顔表現では、頭部15個体中眉鼻貼付は5個体あり、口～胸部に凹部をもつものが多い。胸部は貼付をもつものは少なく腕の脇部分から胸部付近に貫通孔をもつものが多い。一方臍部は貼付が多い。正中線は肋骨状モチーフの間が無文となるものが多い。腕部は表裏共に横線、次いで無文が多い。胴部表は縦線が多く、胴部裏は鋸歯状の沈線による肋骨状モチーフが多く、次いで無文が多い。脚部表は斜線、斜線＋渦巻が多いが、脚部裏は渦巻が多い。

④塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡

塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡は岩手県雫石町、雫石川と繋がる御所湖（御所ダム）沿岸に位置する集落跡遺跡である。早期、大木2、6～8b式土器が出土しているが、大半の遺構の帰属時期で圧倒的に出土量が多いものは大木7a式であると報告されている（財団法人岩手県埋蔵文化財センター1982）。遺構内外出土の資料を分析対象とし、観察したものは合計で51点である。

腕形はY字が多く、脚形は二脚のものが多い。頭部に貫通孔をもつものも少ないものよりもやや多く、頭部の裏面は無文が多い。顔部は頭部15個体中目の沈線があるものは1個体、眉鼻貼付は2個体のみで、口～胸部に凹部をもつものが多い。胸部は貼付＋貫通孔、次いで貫通孔が多く、貼付のみは少ない。一方臍部は貼付をもつものが多い。正中線は肋骨状モチーフの間が無文となるものも多く沈線が施されるものもあるが、胴部裏面が無文で表現がないものも多い。腕部は表

裏共に横線・無文が多い。胴部表は縦線、次いで無文が多い。胴部裏は鋸歯状の沈線による肋骨状モチーフが多く、表面同様次いで無文が多い。脚部表は斜線＋渦巻、縦線、斜線が多いが、脚部裏は渦巻が最も多く、他も斜線＋渦巻、斜線（弧状）＋渦巻など下部に渦巻がくるものが多い。

⑤鳩岡崎遺跡

鳩岡崎遺跡は岩手県北上市、和賀川の北側段丘上に位置する。前期末葉～晩期・奈良・平安・近世以降の複合遺跡で、特に前期末葉～中期中頃は集落が拡大し、該期の遺物（大木6～7a式）も多数出土している。遺構内外出土の資料を分析対象とし、観察したものは合計で54点である。

腕形はY字が、脚形はO脚が多く一脚はない。頭部は16個体中15個体に貫通孔があるが、頭部裏面は無文が多い。目・眉・鼻の表現はなく口～胸部凹部や口～胸部凹部＋貫通孔をもつものが多い。胸は貼付をもつものはなく貫通孔をもつものがあるが、臍は貼付をもつものが多い。正中線は肋骨状モチーフの間が無文となるものが多い。腕部は表裏共に横線・無文が多い。胴部表は縦線が多く、斜線・無文もある。胴部裏は鋸歯状の沈線による肋骨状モチーフが多く、次いでそれに渦巻が加わったものも多くみられ、腕部や胴部表と異なり無文が少ない。脚部表は斜線、斜線（弧状）、斜線＋渦巻、斜線（弧状）＋渦巻、無文がある。脚部裏は斜線（弧状）が多くO脚に沿うように施される。また、斜線＋渦巻、斜線（弧状）＋渦巻、渦巻など下部に渦巻がくるものも多い。

⑥滝ノ沢遺跡

滝ノ沢遺跡は岩手県北上市、和賀川の南側段丘上に位置する。縄文時代前期～中期・晩期、平安時代の複合遺跡であるが、縄文前期後葉～中期前葉（大木5～7b式）がほとんどで特に大木6式が主体の拠点集落である。竪穴建物跡は遺物包

含層と重なっており検出数は少ないが、遺物量は非常に多い。北上市教育委員会、(公財) 岩手県文化振興事業団による調査の遺構内外出土の資料を分析対象とした。観察したものは合計で 102 点である。

腕形は Y 字が多いが十字もある。脚形は O 脚が多いが二脚・一脚もある。頭部は 19 個体中 15 個体に貫通孔があるが、頭部裏面は無文が多い。眉の表現の可能性がある沈線が 3 個体あるがそれ以外の表現はなく、口～胸部の凹部がややある。胸は貼付をもつものは少なく貫通孔をもつものが多いが、臍は貼付をもつものが多い。正中線は肋骨状モチーフの間が無文となるものがあるが、胴部裏面が無文で表現がないものも多い。腕部は表裏共に横線・無文が多い。胴部表は縦線が多く、次いで無文が多い。胴部裏は鋸歯状の沈線による肋骨状モチーフが多く、次いで無文が多い。また、鋸歯状の沈線による肋骨状モチーフに渦巻が加わったものも一定数ある。脚部表は斜線、斜線(弧状)が多く、斜線+渦巻、斜線(弧状)+渦巻がある。脚部裏は斜線(弧状)が多く、O 脚に沿うように施される。また、斜線+渦巻、斜線(弧状)+渦巻、渦巻など下部に渦巻がくるものも多い。

5 遺跡間の比較

土偶の属性分類を行った結果、6 遺跡の共通点として腕形では Y 字がやや多く十字が一定数、臍部の貼付、腕部表裏に横線、胴部表面に縦線、胴部裏面に肋骨状、脚部表裏に斜線や斜線+渦巻、渦巻が多いという点が挙げられる。文様モチーフが共通するものが多く、二文化圏の土偶がよく類似していることが改めて確認されたといえる(図 3・表 1)。

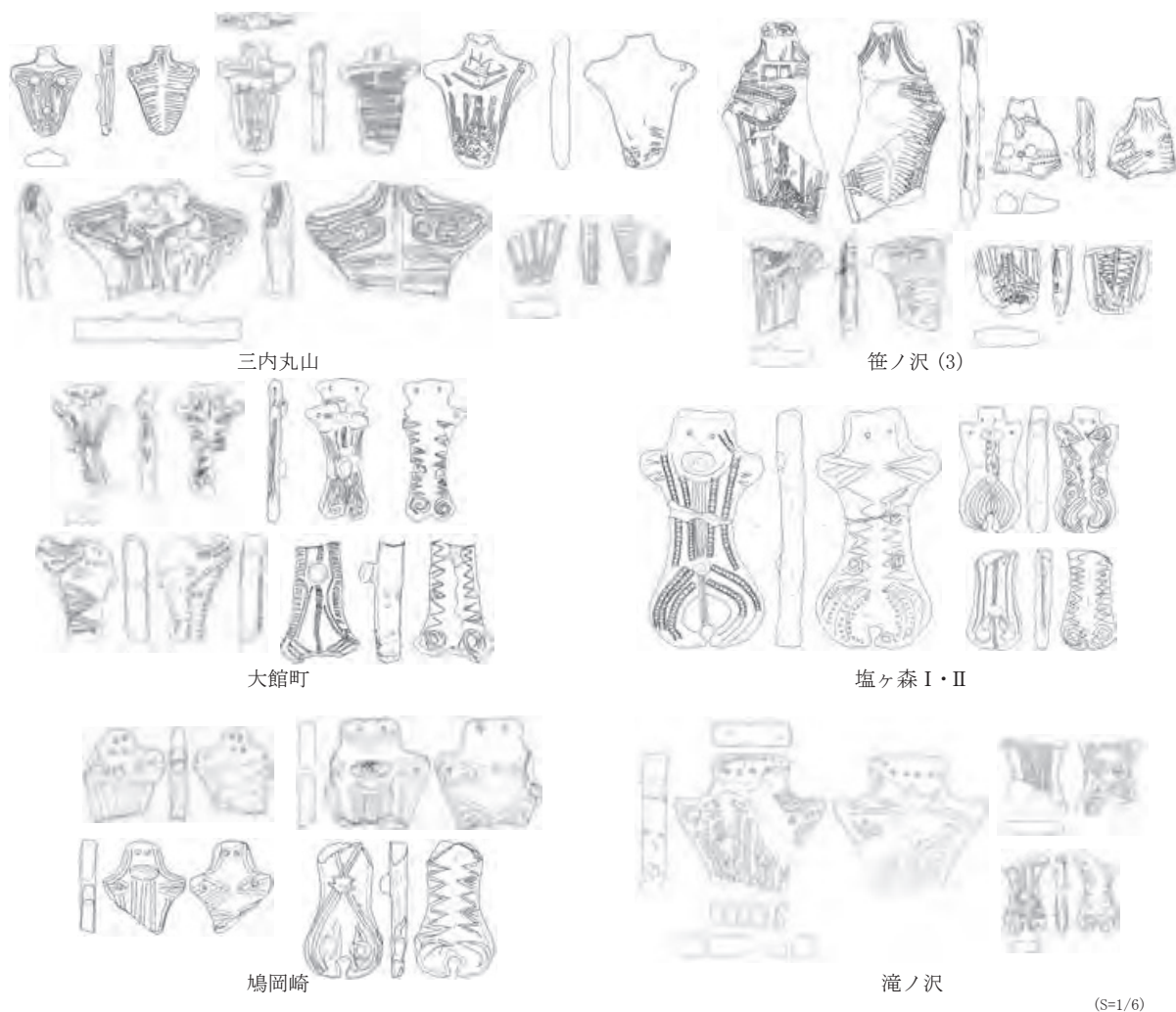
一方、二文化圏を比較すると相違点も多くみられる(図 4～6)。差異としては、脚部形は円筒土器文化圏では一脚が多く大木式土器文化圏では O 脚・二脚が多い点(図 4)、頭部貫通孔は円筒に少なく大木に多い点、頭部裏面では円筒は縦線、大木は無文が多い点、顔表現は円筒は目表現や眉鼻貼付が一定数あるが大木はそれらが少なく口～胸部凹部のみが多い点(図 5)、胸表現は円筒は貼付が多いが大木では少ない点、腕部・胴部は大木の方が無文の割合が高い点、胴部裏面は肋骨状文様を形成するモチーフが円筒では直線・ホウキ状が多いが大木では鋸歯状沈線が多い点等が挙げられる(図 6)。また、表には表れていないが腕部の貫通孔が大木に多い点、胸部突起下の W 状施文(小笠原 2017)が円筒に多い点も指摘される。

	腕形			脚形			頭部			頭部(裏)					顔					胸			臍			正中線						
	Y字	十字	異形	O脚	二脚	一脚	貫通孔	貼付	貫通孔無	無文	縦線	斜線	肋骨状(鋸歯)	貼付	目	眉鼻貼付	眉	口	口凹部+貫通孔	貫通孔	貼付	貼付+貫通孔	貫通孔	貼付	貫通孔	凹部	凹部	沈線	刺突	無文	なし	
三内丸山	22	8	1	0	3	38	5	1	18	0	11	3	4	0	0	6	6	2	13	0	1	26	0	1	30	0	1	30	11	2	18	9
笹ノ沢(3)	2	1	0	0	1	17	0	0	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	7	1	1	7	1	0	1	8	1	13	1
大館町	9	4	2	4	10	8	12	0	2	7	5	0	1	1	0	5	0	9	3	0	2	2	9	13	0	1	0	2	0	20	6	
塩ヶ森	12	6	0	3	17	5	7	2	5	10	2	0	0	0	3	1	2	0	10	3	0	1	10	6	14	0	2	0	5	1	13	14
塙岡崎	16	2	0	20	3	0	15	0	0	11	3	0	0	2	0	0	0	0	4	6	0	0	7	13	0	2	0	4	0	23	5	
滝ノ沢	15	6	1	23	5	3	15	0	4	12	3	0	4	0	0	0	0	3	6	1	1	2	1	15	17	1	0	0	2	0	11	13

	腕表					腕裏					胴部表				胴部裏									
	横線(貫含)	斜線(貫含)	横線+渦巻(貫含)	渦巻(貫含)	無文(貫含)	横線	斜線	横線+渦巻	渦巻	肋骨状(鋸歯)	無文	縦線	縦線+渦巻	斜線	無文	肋骨状	肋骨状(鋸歯)	肋骨状(おき)	肋骨状+渦巻	肋骨状(鋸歯+渦巻)	肋骨状(おき+渦巻)	渦巻	縦線	無文
三内丸山	17	3	12	3	6	17	4	11	2	0	7	60	12	0	0	30	3	21	8	0	1	0	0	9
笹ノ沢(3)	5	2	1	0	1	6	0	1	0	0	1	32	0	0	1	8	0	18	1	0	0	0	3	0
大館町	11	2	0	0	5	12	1	0	0	1	5	28	0	0	3	4	16	0	0	2	0	0	1	6
塩ヶ森	6	1	1	0	10	9	0	2	0	0	7	23	0	0	9	5	15	0	0	2	0	0	0	10
塙岡崎	13	0	1	0	7	13	0	1	0	3	4	24	0	3	4	1	21	0	2	6	0	0	0	1
滝ノ沢	16	3	2	1	13	22	0	1	0	0	13	37	0	0	13	3	17	0	1	5	0	5	3	14

	脚表								脚裏										
	斜線	斜線②	斜線(弧状)	斜線+渦巻	斜線②+渦巻	斜線(弧状)+渦巻	渦巻	縦線	無文	斜線	斜線②	斜線(弧状)	斜線+渦巻	斜線②+渦巻	斜線(弧状)+渦巻	渦巻	縦線	肋骨状(鋸歯・おき含)	無文
三内丸山	11	0	0	24	1	0	2	2	0	14	0	0	7	1	0	1	0	13	5
笹ノ沢(3)	11	4	0	0	1	0	0	3	1	5	3	0	1	2	0	1	4	3	2
大館町	9	3	1	5	0	1	1	0	2	3	3	0	2	0	0	10	0	0	4
塩ヶ森	5	0	3	7	0	2	2	7	1	0	0	0	2	0	3	14	1	1	6
塙岡崎	6	0	6	4	0	3	1	2	4	5	0	7	3	0	2	4	0	2	4
滝ノ沢	12	2	12	4	0	3	0	0	1	4	0	13	3	0	6	5	0	0	3

表 1 土偶の属性比較



(S=1/6)

図3 各遺跡の土偶



(S=1/4)

図4 各遺跡の土偶の顔表現

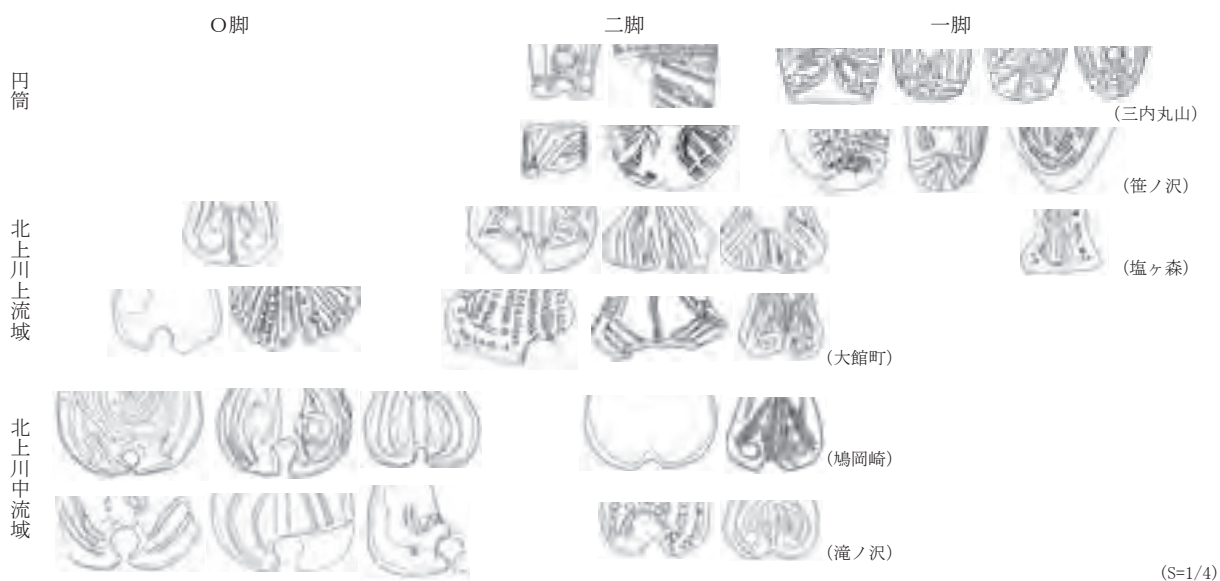


図5 各遺跡の土偶の脚部形態



図6 肋骨状モチーフの比較

また、同じ文化圏内でも差異は認められる。例えば、三内丸山遺跡と笹ノ沢（3）遺跡を比較すると、三内丸山遺跡の方が腕部・胴部裏面・脚部などに渦巻モチーフが加えられたものや渦巻を多用する例が顕著にみられる。他に、胴部裏面では、三内丸山遺跡では直線のモチーフを、笹ノ沢（3）遺跡ではホウキ状のモチーフを組み合わせて肋骨状の文様を作るものの方が多い。

また、北上川上流域の大館町遺跡・塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡、中流域の鳩岡崎遺跡・滝ノ沢遺跡と流域ごとに土偶の差異がみられた。脚形では上流域で

は〇脚が少なく二脚が多いが中流域では〇脚が多い点、顔表現では上流域では眉鼻貼付が見られる点、胸貼付は上流域では一定数あるが中流域では少ない点、胴部裏面の肋骨状＋渦巻モチーフは上流域では少ないが中流域では一定数ある点、脚部表面は上流域では斜線、斜線＋渦巻が多く、中流域では斜線・斜線（弧状）が多い点、脚部裏面は上流域では尻部に渦巻が大多数で中流域では渦巻もあるが斜線・斜線（弧状）が一定数ある点等がある。

6 共通性・相違性の要因

前章で挙げられた共通性・相違性の要因については、地域差・時間差があることが想定される。時間差については、前期末葉～中期初頭の土器型式の細分・編年が難しいことから、伴出土器から時間差を読み取ることは困難であると筆者は感じた（注9）。すべての遺構出土の共伴事例を確認していないが、今回扱った土偶の時期は6遺跡とも近い時期に属するものと判断した。そのため、ここでは伴出土器でなく土偶の属性から地域差・時間差を考えたい。

まず、円筒・大木両文化圏の土偶の高い共通性の要因としては、土偶の製作に明確なルールがあり、その規範が二つの文化圏に共通して存在していたこと＝近い時期に強い影響・交流関係にあったことが推測される。

続いて、相違点の要因として、まずは円筒土器文化圏をみていく。三内丸山遺跡の渦巻モチーフの多用に関しては、細沈線・沈線文に後続する時期に多くみられる縄押圧が施される土偶でも渦巻モチーフが多用されるため、三内丸山遺跡の土偶の特徴の可能性がある。胴部裏面の肋骨状文様は、ホウキ状モチーフは大木式土器文化圏の鋸歯状のモチーフに近く、笹ノ沢（3）遺跡の土偶の方がその位置上大木式土器文化圏の影響を強く受けた可能性がある。

大木式土器文化圏については、北上川上～中流域どちらも頭部や腕部・胴部の片面もしくは両面が無文となるものの比率が高く、こうした無文の土偶は北上川下流域に多い。また、北上川上流域

では脚部形態の比率でO脚が減少し二脚・一脚が増加する点、顔表現の眉鼻貼付・胸表現が少量存在する点は、円筒土器文化圏の土偶の影響を受けた個体が一定数あることを示す。また、中流域では脚形の比率はO脚が大半である点、顔表現・胸表現がほぼなく口～胸部凹部のみ多用される点などは、前期後葉の北上川下流域の土偶（図7）



図7 北上川下流域前期後葉の土偶

に類似するものが多いことを示す。つまり、北上川上流域は円筒土器文化圏、中流域は下流域との関係がより強く、地域ごとに異なる特徴を有するようになったと考えられる。

こうした相違性に時期差があるかについて、時期が明らかなものがある北上川下流域の資料も併せてみていく（表4）。北上川下流域では前期前葉から土偶が一定数作られており、前期後葉には多く作られるようになる。図7の土偶は前期後葉（大木5式）に属するとされており（注10）、O脚・口～胸部凹部・無文などの属性はやや古い属性であると考えられる。これらの属性をもち類似する北上川中流域の土偶は、前期末葉～中期初頭の範疇の間でもやや古く位置付けられる可能性がある。

	脚形			頭部		頭部(裏)		顔表現		胸表現		腕文様		胴部裏面文様			
	○脚	二脚	一脚	貫通孔あり	貫通孔なし	無文	縦線	口胸凹部	眉鼻貼付	貼付なし	貼付あり	貫通孔あり	貫通孔なし	無文	肋骨状(鋸歯)	肋骨状(杓々)	肋骨状(直線)
円筒土器文化圏		○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○		◎	◎
北上川上流域	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○	◎		○
北上川中流域	◎	○	○	◎	○	◎	○	◎		◎	○	◎	○	○	◎		○
北上川下流域	◎	○		○	○	◎		◎		◎		○	○	◎			

表4 地域ごとの相違性

一方で、円筒土器文化圏では顔表現・胸表現・一脚・鋸歯でない肋骨状モチーフなどの属性が増加・多用される。これらの属性は前期後葉にはみられないものであるため、前期末葉～中期初頭になって発生した新しい属性であるといえる。

これらの土偶の属性の変遷からみると、〇脚→二脚→一脚、肋骨状（鋸歯）→肋骨状（ホウキ）→肋骨状（直線）なども、時期差による変遷として捉えることもできる。近い時期ではあるが北上川中流域のものがやや古く、北上川上流域を経て、円筒土器文化圏のものがやや新しいという時間差があった可能性を指摘できる。

また、円筒土器文化圏の脚部形態は一脚が大多数を占める。北上川上流域にも不整な二脚や一脚が少数あるが、円筒土器文化圏の一脚の形態は、小笠原が以前から指摘しているように（小笠原 2018 ほか）岩偶に最も類似すると考えられる。

7 円筒土器文化圏内の板状〇脚土偶の出土と隣接地域の状況

前章では土偶に明らかな地域性があり、それは

遺跡の位置による影響関係の違いが関係することが確認された。また、両文化圏の土偶に時間差がある可能性があり、北上川中流域が古く円筒土器文化圏が新しいものであると想定した。しかし、土偶の属性の差のみから時間差として把握することは難しく、確定はできないと思われる。

そのため、大木式土器文化圏→円筒土器文化圏方向の影響を示す事例として、円筒土器文化圏内の「板状〇脚土偶」の出土事例を示す（図8）。円筒土器文化圏の太平洋側では、板状〇脚土偶が出土した事例が青森県東北町古屋敷貝塚、八戸市石手洗遺跡、蟹沢（2）遺跡、牛ヶ沢（4）遺跡、岩手県二戸市上里遺跡の5例あり、牛ヶ沢（4）遺跡と上里遺跡では円筒土器文化圏の細沈線・沈線文が施される土偶も出土している。脚部の形や文様のモチーフからは、模倣品ではなく搬入品と考えられることが指摘されている（鈴木 1985）。

また、三内丸山遺跡や大日向Ⅱ遺跡では板状〇脚土偶の影響を受けた可能性がある土偶が出土している。一方で、大木式土器文化圏で円筒土器文化圏の沈線系の土偶が出土した事例は確認できない。



図8 円筒土器文化圏内の「板状〇脚土偶」出土事例と隣接地域の状況

これらの状況から、前期末葉～中期初頭には大木式土器文化圏から円筒土器文化圏への強い影響があり、土偶の製作や、土偶流行の開始そのものにも影響を与えたことが推測される。(註11)

加えて、以前から鈴木が指摘しているように(鈴木1985)、前期末葉～中期初頭の円筒土器にはほとんど用いられない沈線で土偶の文様が施されることも、強い影響があったことを示唆している。

隣接地域の状況としては、北上川下流域では前期中葉から土偶が作られ、前期後葉(大木5式)には盛行することが確認されつつある(佐藤2012)。北海道では土偶の流行は中期以降で、中期前葉には少なく中葉以降に増加することが指摘されている(長沼1999)。また、北海道では細沈線や沈線、刺突が施される土偶は少なく、後続する縄を押圧するものからまとまった出土が確認されるようである。こうした状況からも、土偶の流行が徐々に北上した状況が推測される。

8 まとめ

土偶の属性分類を行い遺跡間で比較した結果、円筒土器文化圏、北上川上流域・中流域において類似しつつも地域性がある土偶が分布することがわかった。また、その地域性は遺跡の位置が近いところでよく類似することが指摘された。

また、土偶の属性変遷と板状O脚土偶の出土事例から、大木式土器文化圏の土偶がやや先行して存在し、円筒土器文化圏の土偶や土偶流行の開始に影響を与えた可能性を提示した。

一方、円筒土器文化圏の土偶には岩偶も大いに影響すると考えられた。太平洋側に板状O脚土偶が複数搬入されているにも関わらず、円筒土器文化圏の土偶が一脚となった要因として、元々日本海側を中心として、土偶の流行以前に根付いていた岩偶の文化が引き継がれたものとするのが妥当と思われる。

また、本論では前期末葉～中期初頭に大木式土

器文化圏→円筒土器文化圏への影響が強かったことを想定したが、中期前葉以降は円筒→大木の影響が強くなり、顔表現や縄押圧の使用などが南下することが指摘されている(小笠原2018ほか)。今回はこの後続する時期のものは扱えなかったが、影響関係の変化があるかどうか、今後の課題としたい。

謝辞

資料調査の際には盛岡市遺跡の学び館の津嶋知弘氏、(公財)岩手県文化振興事業団岩手県埋蔵文化財センターの星雅之氏、松政里奈氏に大変お世話になった。また、文化財保護課埋蔵文化財グループの小笠原雅行氏、三内丸山遺跡保存活用推進室の皆様からは様々なご教示を頂いた。記して感謝を表す。

註

註1：円筒土器文化圏では前期末葉以前にも土偶の出土事例がある。例えば白座遺跡で円筒下層a式・白座式に伴い小型の土偶が出土しているほか、畑内遺跡・大日向Ⅱ遺跡では肩パッド岩偶形の土偶がみられる。しかし、一遺跡で数点以上というまとまった出土状況がみられるようになるのは前期末葉以降である。

註2：両文化圏共にかなり早くから資料紹介は行われていたが、その数が多いためここでは資料紹介を中心としたものは扱っていない。

註3：円筒土器文化圏では、鳴沢遺跡で下層d2式期の包含層から縄押圧が施された土偶が出土している。笹ノ沢(3)遺跡では沈線文の土偶と共に縄の押圧によって文様が施された土偶が出土しており、三内丸山遺跡では縄押圧と沈線がどちらも施された土偶が確認されている。このことから、円筒土器文化圏では前期末葉～中期初頭に土偶が盛行しその早くから沈線・細沈線と縄押圧の手法がどちらも用いられていた可能性がある。しかし、縄押圧の手法は出土事例や土器の文様との比較等から、中期前葉(円筒上層b式)に入ってから多用されると考えられ、新しい時期のものが分析対象に混じることを避けるため、沈線・細沈線が施される土偶を扱うこととした。また、編年案によっては同じ沈線系の土偶でも時期差が設けられているものもあるが(金子2012)本論では近い時期のものとして扱った。沈線文が施されるものでも中期後葉に属すると考えられるものは除外した。

註4：大木式土器文化圏内では雲南遺跡・煤孫遺跡・横町遺跡など土偶が数十点以上出土している遺跡があるが、資料調査の際に実見できた遺跡を中心に対象遺跡を選択した。

註5：筆者の考えにより表裏を変更したものが数点あるが、主に口へ胴部の凹部表現・臍の貼付は表面、正中線表現が裏面にあるものと考えて変更したものがほとんどである。

註6：文様については、円筒土器文化圏と大木式土器文化圏どちらも様々な表現があり多岐に渡るため、図2では代表的なものを図示している。両文化圏を比較すると一方の文化圏にしか見られないものが多少あり、特に脚部は形態の違いにより一括して図示することはできなかったため、図では両文化圏を分離して表現した。しかし、文様（モチーフ）の大枠（構造）が類似するものは同様の名称とした。

註7：対象としたものの中でも、小片で部位が特定できないものや文様の構造が想定できないものは分析対象外とした（三内丸山遺跡以外も同様）。

註8：大館町遺跡では前期末葉～中期前葉の遺構は少ないが、後続する時期である中期中葉～後葉の遺構の覆土中から当該期の遺物が出土している例が多い。これは中期中葉～後葉の遺構によってそれ以前の遺構が削平されたことによるものと考えられ、遺構覆土中や包含層からはその時期の遺物も多く確認されていることがそれを裏付けると指摘されており（盛岡市教委1997）、前期末葉～中期前葉にも大規模集落があったことが想定される。

註9：三内丸山では前期の包含層である第6鉄塔地区から完形の土偶が出土しており、前期末葉（下層d2式期）に位置付けられている（小笠原1999）。一方、前期末葉～中期後葉の包含層である北盛土・南盛土・西盛土からも多数の土偶が出土しており、細沈線文が施される土偶は中期にも作られていた可能性がある。このため、三内丸山遺跡では前期末葉～中期初頭に細沈線文が施される土偶が位置付けられている（小笠原2017）。笹ノ沢（3）遺跡は上層a式土器が主体的に出土し集落もほぼその時期に限られることから、土偶も該期のものであると考えられる。大館町遺跡では中期後葉の遺構が多く土偶の帰属時期は判然としない。塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡では大木6～8b式が多く出土しているが特に7a式が多いこと、鳩岡崎遺跡では大木6～7a式の出土が非常に多いこと、滝ノ沢遺跡では大木5～7b式が出土しており6式が主体であることが報告中で指摘されている。よって、今回分析した6遺跡の土偶は土器型式でいえばすべて縄文時代前期末葉～中期初頭に属することとなる。

註10：嘉倉貝塚では図3の土偶が大木5式の竪穴建物跡の床面直上から出土している。

註11：前期末葉～中期初頭には円筒土器文化圏で多く大木6～7a式土器が出土する（茅野2002）。また、異系統土器も多くみられ、土偶以外にも大木→円筒の影響を示すものがあると思われる。

参考文献

稲野裕介・金子明彦・熊谷常正・中村良幸1992「岩手県の土偶－縄文時代後・晩期を中心に－」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集 土偶とその情報』

稲野裕介1993「円筒土器に伴う岩偶（1）－形態と大きさについて－」『考古学ジャーナル362』

稲野裕介1997「円筒土器に伴う岩偶（2）」『土偶研究の地

平「土偶とその情報」研究論集（1）』

稲野裕介1998「北上川中流域における板状のO脚土偶とそれ以外の形態について」『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』

稲野裕介1999「円筒土器に伴う岩偶（3）－分布の南辺における肩パッド型岩偶の様相－」『北上市立埋蔵文化財センター紀要第1号』

稲野裕介1999「遺物研究 岩偶」『縄文時代文化研究の100年 縄文時代第10号第4分冊』

稲野裕介2002「円筒土器に伴う岩偶（4）－前期大木式土器圏の岩偶とその伴出遺物－」『北上市立埋蔵文化財センター紀要第2号』

稲野裕介2005「円筒土器に伴う岩偶－三内丸山遺跡の資料を中心に－」『特別史跡三内丸山遺跡年報－8－』

稲野裕介2006「三内丸山遺跡出土の岩偶－報告書の見解に関する意見－」『特別史跡三内丸山遺跡年報－9－』

稲野裕介2012「岩偶－東北地方縄文時代前期の岩偶の表裏について－」『季刊考古学119』

岩田安之2017「第4節 岩偶」『三内丸山遺跡44 第一分冊』岩手県立博物館2005『岩手県立博物館第54回企画展図録 縄文北緯40°～前・中期の北東北～』

江坂輝弥1966「円筒式土器に伴う土偶」『縄文土器文化研究序説』

江坂輝弥1970『石神遺跡』

小笠原雅行1999「円筒土器文化圏における前期の土偶について－三内丸山遺跡の事例を中心に－」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（3）』

小笠原雅行2002「第Ⅳ章 人々の暮らし 第2節 道具 5項 土偶・岩偶」『青森県史別編三内丸山遺跡』

小笠原雅行2013「円筒土器文化圏の岩偶への一視点」『青森県考古学21』

小笠原雅行2017「第3節 土偶」『三内丸山遺跡44 第一分冊』

小笠原雅行2018「第4項 土偶と岩偶」『三内丸山遺跡44 二分冊』

小笠原好彦1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究1』

長田友也2009「東北地方における縄文時代前期の儀器と精神文化」『日本考古学協会山形大会研究発表資料』

小山修三2001「円筒土器文化の地域性」『特別史跡三内丸山遺跡年報－4－』

金子昭彦2012「大木式北部・板状O脚土偶の編年－東北地方中部における縄文時代前期～中期前葉の土偶－」『岩手県考古学23』

金子昭彦2014「大木式北部・板状裾脚土偶の編年－東北地方中部における縄文時代中期中葉の土偶－」『岩手県考古学25』

熊谷常正1997「岩手県の土偶－その発現期から遮光器土偶成立前夜まで－」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（1）』

近藤悟・阿部博志1994「大木式土器分布圏の土偶について」『東北・北海道の土偶Ⅰシンポジウム発表要旨』

斎藤尚巳1985「北上川流域の土偶について」『日高見国一

菊池啓治郎学兄還暦記念論集一』

佐藤憲幸 2012「興野コレクションの土偶―糠塚貝塚―」『東北歴史博物館研究紀要 13』

鈴木克彦 1985「土偶の研究(Ⅱ) 円筒土器文化に伴う土偶」『日高見国一・菊池啓治郎学兄還暦記念論集一』

鈴木克彦 1992「青森県の土偶―その基礎的研究―」『国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集 土偶とその情報』

鈴木克彦 1994「円筒土器の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅰ シンポジウム発表要旨』

鈴木克彦 2003「円筒土器文化の岩偶の起源とその系譜―岩偶の類型編年―」『國學院大學考古学資料館紀要 19』

茅野嘉雄 2002「青森県内における縄文時代前期末～中期初頭の異系統土器群について―県内出土資料の集成―」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要第 7 号』

富樫泰時・武藤祐浩 1992「秋田県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集 土偶とその情報』

長沼孝 1992「北海道の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集 土偶とその情報』

長沼孝 1999「北海道の土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』

羽生淳子 2005「ジェンダー考古学から見た縄文土偶と文化的景観」『特別史跡三内丸山遺跡年報―8―』

原田昌幸 1998「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(2)』

藤沼邦彦 1992「宮城県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集 土偶とその情報』

藤沼邦彦 1997『歴史発掘③縄文の土偶』

三宅徹也 1990「十字形土偶」『季刊考古学第 30 号』

村越潔 1974『円筒土器文化』

山内清男 1934「是川一王寺遺跡発見の土偶 図版説明(第 18 図版石器時代土偶)」『ドルメン 3-7』

報告書

三内丸山遺跡

青森県教育委員会 1996『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 205 集

青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 230 集

青森県教育委員会 1998『三内丸山遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 249 集

青森県教育委員会 2009『三内丸山遺跡 35』青森県埋蔵文化財調査報告書第 478 集

青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡 39』青森県埋蔵文化財調査報告書第 520 集

青森県教育委員会 2013『三内丸山遺跡 40』青森県埋蔵文化財調査報告書第 533 集

笹ノ沢(3)遺跡

青森県埋蔵文化財調査センター 2001『笹ノ沢(2)・(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 305 集

青森県埋蔵文化財調査センター 2003『笹ノ沢(3)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 346 集

青森県埋蔵文化財調査センター 2004『笹ノ沢(3)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 372 集

大館町遺跡

岩手大学考古学研究会編 1978『岩手県盛岡市大館町遺跡―縄文中期集落址 1976 年度調査報告―』

盛岡市教育委員会 1982『大館遺跡群(大館町遺跡)―昭和 56 年度発掘調査概報―』

盛岡市教育委員会 1984『大館遺跡群 大新町遺跡 大館町遺跡―昭和 58 年度発掘調査概報―』

盛岡市教育委員会 1989『大館遺跡群 大新町遺跡 大館町遺跡―昭和 63 年度発掘調査概報―』

盛岡市教育委員会 1993『大館遺跡群 大館町遺跡―平成 4 年度発掘調査概報―』

盛岡市教育委員会 1997『大館遺跡群(大館町遺跡)―平成 6・7 年度発掘調査概報―』

盛岡市教育委員会 2003『盛岡市内遺跡群 平成 14 年度発掘調査概報』

盛岡市遺跡の学び館 2008『盛岡市内遺跡群 平成 18・19 年度発掘調査概報』

塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡

岩手県埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 雫石町 塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第 31 集

鳩岡崎遺跡

岩手県教育委員会 1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 X V (江釣子村鳩岡崎遺跡)』岩手県文化財調査報告書第 70 集

滝ノ沢遺跡

北上市教育委員会 1983『滝ノ沢遺跡(1977～1982 年度調査)』

北上市文化財調査報告第 33 集

北上市教育委員会 1990『滝ノ沢遺跡Ⅱ(1989 年度調査)』

北上市文化財調査報告第 60 集

北上市教育委員会 1993『滝ノ沢遺跡Ⅳ(1992 年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第 11 集

北上市教育委員会 2003『滝ノ沢遺跡Ⅵ(2001・2002 年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第 56 集

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005『滝ノ沢地区遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 456 集

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012『滝ノ沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 590 集

その他

青森県埋蔵文化財調査センター 1992『鳴沢遺跡・鶴喰（9）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第142集

青森県埋蔵文化財調査センター 2001『蟹沢（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書292集

青森県埋蔵文化財調査センター 2002『畑内遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第326集

青森県埋蔵文化財調査センター 2017『水上（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第575集

岩手県岩手郡雫石町教育委員会 2013『小日谷地ⅠB遺跡発掘調査報告書（平成24年度）』雫石町埋蔵文化財調査報告書第13集

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1983『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994『煤孫遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書：第2次～第5次調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『横町遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第236集

（財）岩手県 1998『大日尚Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第6次～第8次調査—』岩手県273集

上北町教育委員会 1983『上北町古屋敷貝塚1（遺物編）』上北町文化財調査報告書第1集

上北町教育委員会 1986『上北町古屋敷貝塚2（遺構編）』上北町文化財調査報告書第2集

北上市教育委員会 2006『横町遺跡（縄文時代遺物図版編）』北上市文化財調査報告第72集

北上市教育委員会 2008『横町遺跡（縄文時代本文編）』北上市文化財調査報告第90集

階上町教育委員会 1989『白座遺跡・野場遺跡（3）発掘調査報告書』

八戸市教育委員会 2004『牛ヶ沢（4）遺跡発掘調査報告書Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集

宮城県教育委員会 2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集

盛岡市教育委員会 1996『繋遺跡 平成7年度発掘調査概報』

盛岡市教育委員会 1998『繋遺跡 平成8年度発掘調査概報』

盛岡市遺跡の学び館 2013『繋Ⅴ遺跡 繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書』

陸前高田市教育委員会 2006『雲南遺跡』陸前高田市文化財調査報告書第26集

第4 特別研究推進事業成果概要報告

1 個人研究

三内丸山遺跡の埋設土器に付加される人為的行為—二次整形痕を中心に—

高木 麻里帆（さいたま市遺跡調査会）

1 序論

(1) 研究の目的

三内丸山遺跡では、円筒上層式を中心に約 890 基の埋設土器遺構が検出されている。これらは子供の遺体を土器の中に納めた墓であると解釈されている（青森県教育委員会 2017、坂本 2005）。この墓の棺である土器は、もとは煮炊きや貯蔵などに日用的に使用されていたものである。日用的な土器から棺へと転用される際には、土器の選定や二次整形など、さまざまな人為が施されていると推測する（図 1）。そこで、埋設土器を観察し、土器に付加された行為の具体的な加工や特徴などを明らかにしたい。

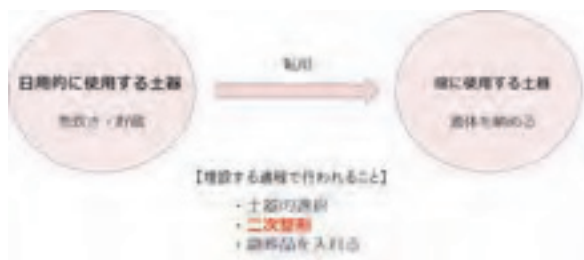


図1 土器を転用する過程

さらに本研究は、三内丸山遺跡において通常の土器が埋設土器として埋められるまでの過程を検討することにより、当時の墓制を解明する一助となることを目的とする。

(2) 研究の方法

これまでの研究（青森県教育委員会 2004・2017、坂本 2005）の中で、破損した埋設土器に対し、加工が施されているという指摘はなかった。

本研究では、埋設土器に付加された二次整形を

検討するため、土器の割れ口に注目する。土器は意図的に打ち欠いた場合、その物性により打ち欠いた箇所すなわち打点から、打ち欠いた方向に向かって割れ口が広がる。一方、自然に割れた状態では人為的な打割の特徴はなく、折れ口を示す。したがって、土器の割れ口を観察することにより、破損した状態の土器が意図的な整形か、自然に壊れたものかを明らかにすることができる。

2 埋設土器に施された二次整形

観察対象は、三内丸山遺跡において埋設土器遺構が集中して分布する北盛土北側のⅥE-84～87、ⅥD-86 グリッドから出土した埋設土器 101 基である。その内、整形・折れなどの有無を含め、細かな観察ができたのは 81 基である（図 2、付表 1）。これらの 5 つのグリッドは事前調査により、遺跡内で特に埋設土器が多く検出され、観察可能な資料が十分得られると判断したため、選定した。

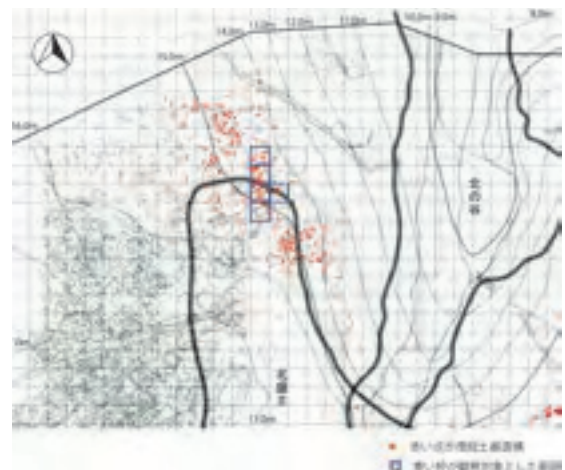


図2 三内丸山遺跡の埋設土器の分布と観察対象とした範囲（青森県教育委員会 2017 を改変）



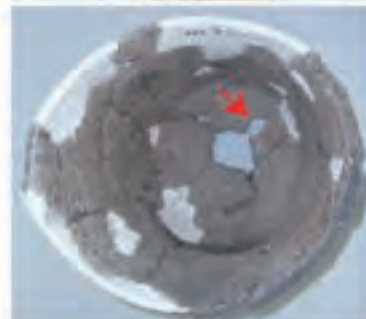
(1) 把手を打ち欠く (第 357 号埋設土器遺構)



(2) 口縁部を打ち欠く (第 66 号埋設土器遺構)



(3) 口縁部から底部にかけて斜めに打ち欠く
(第 85 号埋設土器遺構)



(4) 底部を穿孔
(第 68 号埋設土器遺構)

➡ 打点と打ち欠く方向を示す

図 3 二次整形の事例

観察の結果、34 基に口縁部・胴部の打ち欠きや底部の穿孔など二次整形を行った痕跡が確認された。二次整形には次の4 種類がある。表1 にその種類ごとの数を示した。

種類(1) 把手を打ち欠く(図3-(1))

土器の把手を打ち欠き、土器本体から把手を外す。4つ全てを外すものや、2～3つなど一部に限る事例も存在する。

種類(2) 口縁部を打ち欠く(図3-(2))

土器の口縁部を全面縁あるいは一部を打ち欠く。

種類(3) 口縁部から底部にかけて斜めに打ち欠く(図3-(3))

(2)と同様に口縁部を打ち欠くだけでなく、胴部の打ち欠きも行う。口縁部から底部にかけて、土器を斜め半分にするように整形する。ただし、底部は全て残す。

種類(4) 底部を穿孔(図3-(4))

土器の底部を土器の外側から複数回打ち欠き、穴を開ける。穴を開ける方向は外側からが多いが、内側からも開けた事例もある。穴は1つに限らず、2つの穴が接した状態で開けられた事例も存在する。この種類の整形が単独で行われた土器は確認されなかった。

これらの二次整形の種類ごとの土器数とその割合は表1・図4で示す通りである。種類(2)口縁部を打ち欠くタイプの整形が全体の62%と最も大きな割合を占める。また、種類(2)の加工が単独で施された埋設土器以外に、5基は種類(1)や種類(3)と組み合わせて行われている。種類(3)の3基に至っては、全てが種類(2)と合わせて整形が施されている。複数の方法を組み合わせて、丁寧に仕上げられていることが読み取られる。胴部下半に関しては、土器の大半は整理作業の際に土器が欠けた部分に石膏を埋め、形が復元され

ていた。割れ口の観察を行えず胴部下半を意図的に打ち欠いたか、土圧などにより割れたかどうかを判断することが困難であった。そのため胴部下半については二次整形の検討を行わなかった。

以上のように、埋設土器の二次整形は種類(2)、土器の口縁部を打ち欠くタイプが最も一般的であり、その形や底部穿孔は棺の特徴と言える。今回観察できなかった部位も残されていることから、二次整形の種類は4種類に留まらず、さらに多くの種類やバリエーションが予想される。

表1 二次整形の種類ごとの埋設土器の数

二次整形の種類	埋設土器の数
種類(1) 把手を打ち欠く	3
種類(2) 口縁部を打ち欠く	21
種類(3) 口縁部から底部にかけて斜めに打ち欠く	5
種類(4) 底部を穿孔	0
種類(1)と種類(2)の組合せ 把手と口縁部の打ち欠き	2
種類(2)と種類(4)の組合せ 口縁部の打ち欠きと底部穿孔	3
二次整形なし	47
不明	20
合計	101

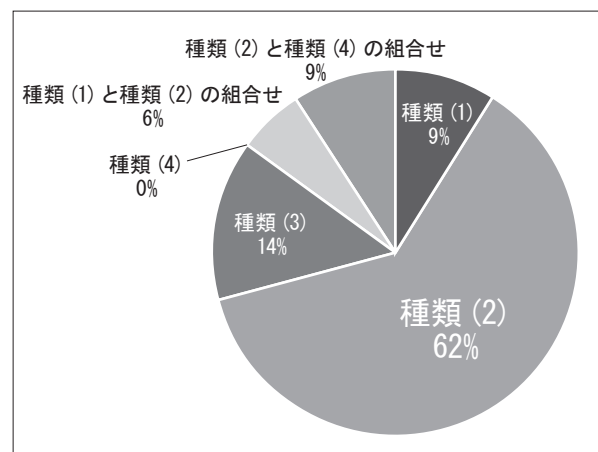


図4 二次整形の種類の割合

3 二次整形の意図

二次整形を行った意図は明らかではないが、筆者は2つの可能性を考える。一つは、通常の土器から埋設土器へと機能を変化させること、もう一つは棺専用に土器を整形することである。

(1) 機能の変化

観察した埋設土器81基の内、56基から受熱痕及び焦げの付着が確認された。したがって、埋設土器の大半は日用的に煮炊きや貯蔵に使用していた土器が、棺に転用されたと想定される。そこで、埋設土器に施された二次整形に着目すると、種類(1)は土器の最も装飾を施した部分である、把手を取り除く行為である。これは、製作された時に土器が表現していたことや、土器自身が持っていた意味を打ち消していると考えられる。また種類(3)(4)については、土器を斜め半分に割ったり、底部に穴を開けたりすることで、土器本来の器としての用途を果たせなくしている(図5)。

これらのことから、煮炊きや貯蔵のために使用していた土器を埋設土器に転用する際に、土器を打ち欠くことにより、目に見える形で転用前の土器が元々持っていた意味や使い道を失わせ、棺へ



図5 器の機能を失ったと考えられる土器

と機能を変化させたり、変化したことを示したりしたと予想する。

(2) 棺の整形

二次整形を行った2つ目の目的として、棺の形を整えていたことを挙げる。序論で述べたように、土器の転用を行う過程で、土器の選択や二次整形が行われていたと考えられる。これらを検討するために、埋設土器の大きさにも着目したい。

埋設土器の観察を行った際に、二次整形痕の確認と同時に、埋設土器の器高と底径の記録も行った。それをもとに、二次整形が確認された土器と

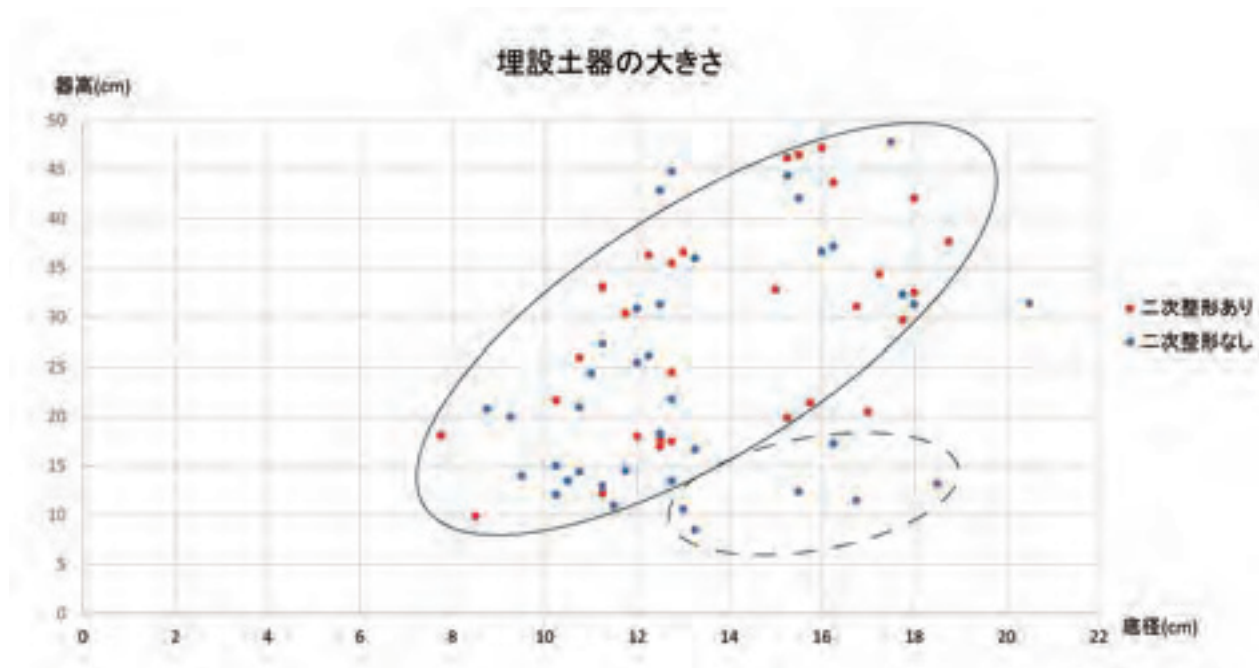


図6 二次整形の有無による埋設土器の大きさの比較

確認されなかった土器の大きさの比較を行った。その結果、図6のグラフと黒い実線の楕円が示すように、二次整形が確認された埋設土器も、確認されなかった土器も、共通した範囲で土器の分布の集中が見られた。埋設土器には基準となるサイズまたは縦横の比率が存在していたと考えられる。また、二次整形が行われた土器は大きさが大小様々であるのに対し、二次整形を行わなかった土器はほぼ完形の土器を含め、小さなものが多いのが特徴的である。これらのことから、転用の際には日常的に使用していた土器の中から、基準に合ったサイズの土器を選択していた、また大きなサイズの土器は整形することで高さをより整えていたと推測できる。なお、こうしたサイズを満たしていない点線の楕円で示した埋設土器に着目すると、土器のサイズが基準よりも少々小さくても、底径の大きさが基準を満たしていれば、整形することなくそのまま使用していたと考えられる。

図7では、二次整形の種類ごとに容量の分布を示した。種類(2)は全体に広がっているのに対し、種類(1)(3)(4)は、それぞれが一部に

集中している。二次整形の種類と土器の大きさにも関係があると言えるだろう。したがって、土器の打ち欠きを行う際には、完成形に対し種類・大きさ共に明確に基準が設けられていたことが考えられる。

三内丸山遺跡の埋設土器遺構内から子供の遺骨が出土した事例はない(青森県教育委員会 1994・2004・2017)。よって、子供の大きさや年齢に伴う棺の容量の変化を検討することはできなかった。

4 結論

三内丸山遺跡における埋設土器の観察を行った結果、受熱痕及び焦げの付着や数種類の二次整形痕が確認された。日常的に使用していた土器に二次整形を行い、埋設土器に転用していたことが明らかになった。その目的として、土器の機能の変化と棺の整形を考えた。

なお、本研究で調査した埋設土器は三内丸山遺跡の一部に過ぎない。三内丸山遺跡だけでなく他遺跡の事例と比較検討することにより、円筒文化圏での埋設土器の位置づけを明らかにしたい。

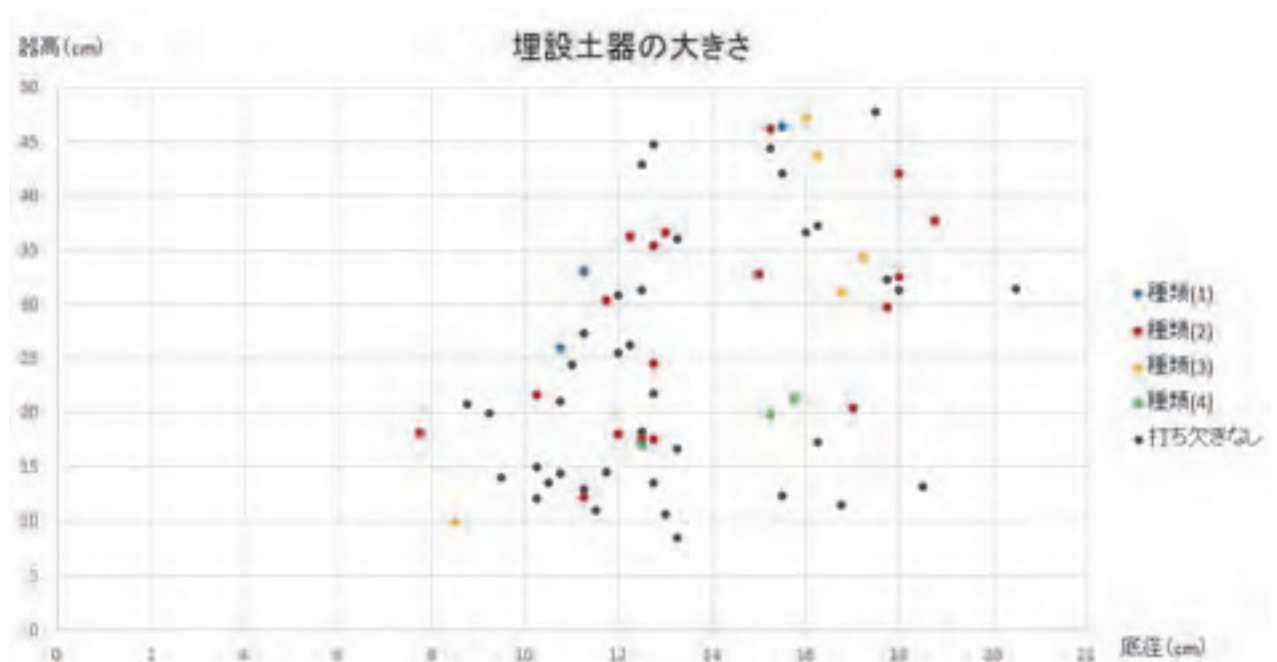


図7 二次整形の種類ごとの埋設土器の大きさの比較

本研究を行うにあたり、剥離について岡村道雄氏、土器型式について成田滋彦氏にご指導を頂きました。心より感謝申し上げます。

参考文献

青森県教育委員会 1994『三内丸山（2）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
 青森県教育委員会 2004『三内丸山遺跡25』青森県埋蔵文化財調査報告書第383集

青森県教育委員会 2017『三内丸山遺跡44』青森県埋蔵文化財調査報告書第588集
 坂本真弓 2005「青森県における縄文時代前期の土器埋設遺構」『研究紀要』第10号, 青森県埋蔵文化財調査センター, 1-14頁

付表1 観察対象とした埋設土器遺構一覧

	遺構名	出土地点	時期	二次整形		容量			受熱痕および焦げの付着
				有無	種類	残高	復元器高	底径	
1	第65号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	○	2	18.1	24.1	7.75	×
2	第66号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層b式	○	1・2	35.1	41	不明	○
3	第67号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層a式	○	1	26.5	79.5	不明	×
4	第68号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	○	2・4	21.4	42.8	15.75	×
5	第70号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	○	2	12.2	48.8	11.25	○
6	第71号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層a～b式	○	2	42.1	56.1	18	○
7	第72号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層a～b式	○	2	32.8	43.7	15	○
8	第73号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層a式	×	×	31.3	31.3	12.5	○
9	第74号埋設土器遺構	VIE-84・85	円筒上層式	○	2	24.5	32.7	12.75	○
10	第75号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層c～d式	○	2・4	17	19.8	12.5	○
11	第76号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2	29.7	89.1	17.75	×
12	第77号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2	20.5	61.5	17	×
13	第78号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層b式	○	1・2	46.5	46.5	15.5	○
14	第79号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2・4	19.9	59.7	15.25	×
15	第84号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2	35.5	47.3	12.75	○
16	第85号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層c式	○	3	47.2	47.2	16	×
17	第86号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	3	34.4	39.3	17.25	○
18	第110号埋設土器遺構	VID・E-86	円筒上層b式	○	2	33	37.7	11.25	○
19	第111号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	○	3	31.1	46.7	16.75	×
20	第126号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層b～d式	×	×	21.9	29.2	不明	×
21	第131号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a式	○	2	36.6	36.6	13	○
22	第132号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層b式	○	1	33.1	33.1	11.25	○
23	第134号埋設土器遺構	VIE-85・86	円筒上層式	○	3	9.9	29.7	8.5	×
24	第135号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	○	2	37.7	50.3	18.75	×
25	第136号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層b式	○	2	36.3	43.6	12.25	○
26	第139号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層a式	×	×	22.1	25.3	不明	○
27	第140号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	○	2	18	54	12	×
28	第164号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a式	×	×	27.3	36.4	11.25	○
29	第216号埋設土器遺構	VID-86	縄文前期	不明	不明	不明	不明	不明	不明
30	第217号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層a～b式	○	3	43.7	49.9	16.25	○

	遺構名	出土地点	時期	二次整形		容量			受熱痕および 焦げの付着
				有無	種類	残高	復元器高	底径	
31	第218号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	13.5	67.5	10.5	○
32	第219号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層e～複林式	×	×	10.5	15.8	不明	×
33	第244号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	30.9	41.2	12	○
34	第245号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層a～c式	×	×	44.4	50.7	15.25	○
35	第246号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	13	65	11.25	○
36	第247号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層c式	○	2	30.4	34.7	11.75	○
37	第248号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a～c式	×	×	13.2	105.6	18.5	×
38	第249号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	20.8	62.4	8.75	○
39	第250号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	14.7	29.4	不明	○
40	第251号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	26.2	29.9	12.25	×
41	第252号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	13.5	94.5	12.75	○
42	第253号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	14.5	43.5	11.75	×
43	第254号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	11	55	11.5	×
44	第255号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
45	第256号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層c式	×	×	31	34.4	不明	○
46	第257号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2	17.7	53.1	12.5	○
47	第258号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	14	70	9.5	○
48	第259号埋設土器遺構	VID・E-86	円筒上層a～c式	×	×	47.8	54.6	17.5	×
49	第274号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
50	第288号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	32.3	64.6	17.75	×
51	第305号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層a式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
52	第310号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	14.4	57.6	10.75	○
53	第311号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
54	第312号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
55	第313号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
56	第314号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	○	2	40.6	46.4	不明	○
57	第315号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	○	2	不明	不明	不明	○
58	第316号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
59	第317号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層b式	×	×	42.9	42.9	12.5	×
60	第318号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a～c式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
61	第323号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層b式	×	×	36	36	13.25	○
62	第324号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a～c式	×	×	37.2	49.6	16.25	○
63	第325号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	×	×	20	60	9.25	○
64	第326号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層a式	×	×	24.4	24.4	11	○
65	第327号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	×	×	21.8	65.4	12.75	○
66	第329号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
67	第330号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
68	第332号埋設土器遺構	VIE-87	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
69	第333号埋設土器遺構	VIE-86・87	円筒上層式	○	2	46.2	52.8	15.25	○
70	第334号埋設土器遺構	VIE-86・87	円筒上層b式	×	×	44.8	44.8	12.75	×

	遺構名	出土地点	時期	二次整形		容量			受熱痕および 焦げの付着
				有無	種類	残高	復元器高	底径	
71	第335号埋設土器遺構	VIE-87	円筒上層c式	×	×	不明	不明	不明	○
72	第336号埋設土器遺構	VIE-87	円筒上層a～b式	×	×	42.1	47.4	15.5	○
73	第338号埋設土器遺構	VIE-84	円筒上層式	○	2	32.5	97.5	18	○
74	第339号埋設土器遺構	VIE-84	縄文前～中期	不明	不明	不明	不明	不明	不明
75	第340号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
76	第341号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	×	×	18.3	54.9	12.5	○
77	第342号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
78	第343号埋設土器遺構	VIE-87	円筒上層a式	×	×	25.5	26.7	12	○
79	第344号埋設土器遺構	VIE-85・86	円筒上層式	×	×	25	75	不明	○
80	第345号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	8.5	68	13.25	○
81	第346号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	15	45	10.25	×
82	第347号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a式	×	×	17.3	138.4	16.25	○
83	第355号埋設土器遺構	VIE-86	縄文前～中期	不明	不明	不明	不明	不明	不明
84	第356号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層b式	×	×	38	43.4	不明	○
85	第357号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層a式	○	1	26	26	10.75	○
86	第358号埋設土器遺構	VID・E-86	円筒上層式	×	×	16.7	83.5	13.25	×
87	第359号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	10.6	84.8	13	×
88	第373号埋設土器遺構	VIE-86・87	円筒上層式	×	×	31.3	47	18	×
89	第385号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
90	第386号埋設土器遺構	VIE-87	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
91	第388号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	33.5	50.3	不明	○
92	第389号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層a～b式	×	×	36.7	41.9	16	○
93	第390号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	31.4	94.2	20.5	○
94	第391号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	○	2	17.5	70	12.75	○
95	第392号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	21	42	10.75	○
96	第395号埋設土器遺構	VIE-85	円筒上層式	×	×	11.5	115	16.75	○
97	第451号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層a～b式	○	2	21.7	24.4	10.25	○
98	第452号埋設土器遺構	VIE-86	円筒上層式	不明	不明	不明	不明	不明	不明
99	第496号埋設土器遺構	VIE-85	円筒下層式	×	×	12.1	48.4	10.25	○
100	第554号埋設土器遺構	VID-86	円筒上層式	×	×	12.4	86.8	15.5	○
101	第601号埋設土器遺構	VIE-87	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明

2 共同研究

円筒土器文化における集落の実態をさぐる —時間差・地域差・存続期間の比較研究—

青森県教育庁文化財保護課
三内丸山遺跡保存活用推進室

1 はじめに

三内丸山遺跡では特別研究推進事業の共同研究において、平成24～26年の3か年で「円筒土器文化総合研究データベース作成」を行った。この研究では、円筒土器文化に関する遺跡の比較検討を行うための基礎的なデータベースが作成された。また、平成28・29年度には総括報告書として『三内丸山遺跡44』が刊行され、三内丸山遺跡や円筒土器文化の調査や研究の成果がまとめられた。このように、三内丸山遺跡や円筒土器文化について、現在的な視点で、改めて研究が行われている状況である。平成31年度には「三内丸山遺跡センター」として独立公所となり、そこでは最新の研究成果をもとにした企画展示も実施される予定である。三内丸山遺跡センターでは、引き続き調査成果と連動した研究を行い、その成果を展示などに活かして市民に還元していくことが重要であると考えている。

このような状況を踏まえて、特別研究推進事業の共同研究として「円筒土器文化における集落の実態をさぐる」というテーマで、平成29年度から3か年で研究を行うこととした。

2 研究の目的

土器型式だけでなく、建物跡、墓、貯蔵穴、石器、土偶、土製品、石製品などからも型式を見出し、異なる時間軸からの比較を試みる。土器型式に時間軸を頼ってきた考古学的時間を見直すだけでなく、土器とは時間幅の異なるものが存在す

ることなどが整理され、物質文化の新たな比較検討の方向性を見出すことができる。

3 研究内容

遺構や遺物の属性を詳細に比較することによって、集落の実態をさぐる。

時期差や地域差を表す属性を竪穴建物跡、土坑墓、貯蔵穴などで抽出し、地域ごとの変遷図を作成し、円筒土器文化圏における集落の特徴を比較検討する。あわせて、可能な限り遺物の変遷も示していく。

3か年計画で、三内丸山遺跡周辺、青森平野、青森県、4道県と円筒土器文化圏で地域を広げて資料を整理していく。今年度は三内丸山遺跡周辺と青森平野を中心に竪穴建物跡の変遷図を作成し、建物型式の設定を試みる。

4 今年度の研究対象（図2）

- ・青森平野を中心に竪穴建物跡のデータを収集している。
- ・縄文時代前期は岩渡小谷（4）、稲山遺跡、中期は三内丸山、三内沢部（1）、三内丸山（6）遺跡を対象とした。

5 研究方法（図1）

- （1）竪穴建物跡の平面図・断面図などの図面とともに出土遺物、面積や炉の位置などの数値データをデータカードとして作成する（図2）。

(2) 平面形、炉の種類、主柱穴の本数、特殊施設の有無という主要な竪穴建物跡の属性をもとに分類し、特徴を整理する(図3～6)。

(3) 面積や炉の位置などを数値化し、グラフにすることによって、時期や集落ごとの比較を行い、それぞれの特徴を整理する(図7・8)。

(4) 以上の作業を通して、新たな課題等が派生するため、研究会でその内容を検討する。

6 研究の成果

(1) 青森平野の全体的な特徴

- ・大きく2時期に竪穴建物跡数にピークがあり、円筒下層b～d式期と円筒上層d・e式期である(図3～8)。

- ・円筒下層b～d式期には円形と楕円形・隅丸方形の竪穴建物跡が主体で、b式期からd式期になると面積が大きくなる(図3・7)。

- ・円筒上層d・e式期では楕円形で面積が小さい竪穴建物跡が主体となる(図3・7)。

- ・円筒下層b～d式期では地床炉が主体的であるが、円筒上層e式期になると土器を使用する炉や石囲炉など種類が増える。その後の最花式期以降には石囲炉が主体的になる(図4)。

- ・円筒下層b～円筒上層e式期では炉は長軸の中心に近い場所にあるが、榎林式期からは中心から長軸端によっていく(図8)。

- ・主柱穴の本数が増えると面積は大きくなる傾向にある(図5)。

- ・特殊施設は円筒下層d式期に出現し、円筒上層d・e式期には楕円形の建物跡の長軸端に設置されるものが主体的となる(図6)。

- ・テラスがつくられる竪穴建物跡は円筒下層d式期に特徴的である(図3)。

(2) 集落ごとの特徴

- ・円筒上層d・e式期には、楕円形で面積が小さい定型的な建物跡が主体的であるが、三内丸山(6)遺跡ではそのタイプが少なく、さまざまな形態がみられる。集落の立地している場所には斜面地が多いため、地形にあわせた建物跡になっている可能性がある(図3)。

- ・三内沢部(1)遺跡では土器を使用した炉の割合が高い(図4)。

- ・円筒上層e式期には特殊施設が設置される竪穴建物跡が多い集落(三内丸山遺跡、三内沢部(1)遺跡)とそうでないもの(三内丸山(6)遺跡)がある(図6)。

表1 竪穴建物跡の変遷模式図

特徴・施設		前 期			中 期		
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉
竪穴住居 平面形	円 形						
	楕円形						
	隅丸長方形・方形						
	卵 形						
柱 穴	主 柱 穴	なし					
		2 個					
		4 個					
		6 個					
		その他の数					
	壁 柱 穴						
炉	なし						
	地床炉						
	土器埋設炉						
	石囲炉						
	石囲土器片敷炉						
	石囲土器埋設炉						
	周堤炉						
	土器片囲炉						
	土器片敷炉						
	土器囲土器片敷炉						
壁 溝							
その他の施設	テラス状遺構						
	特殊施設						
	埋 甕						

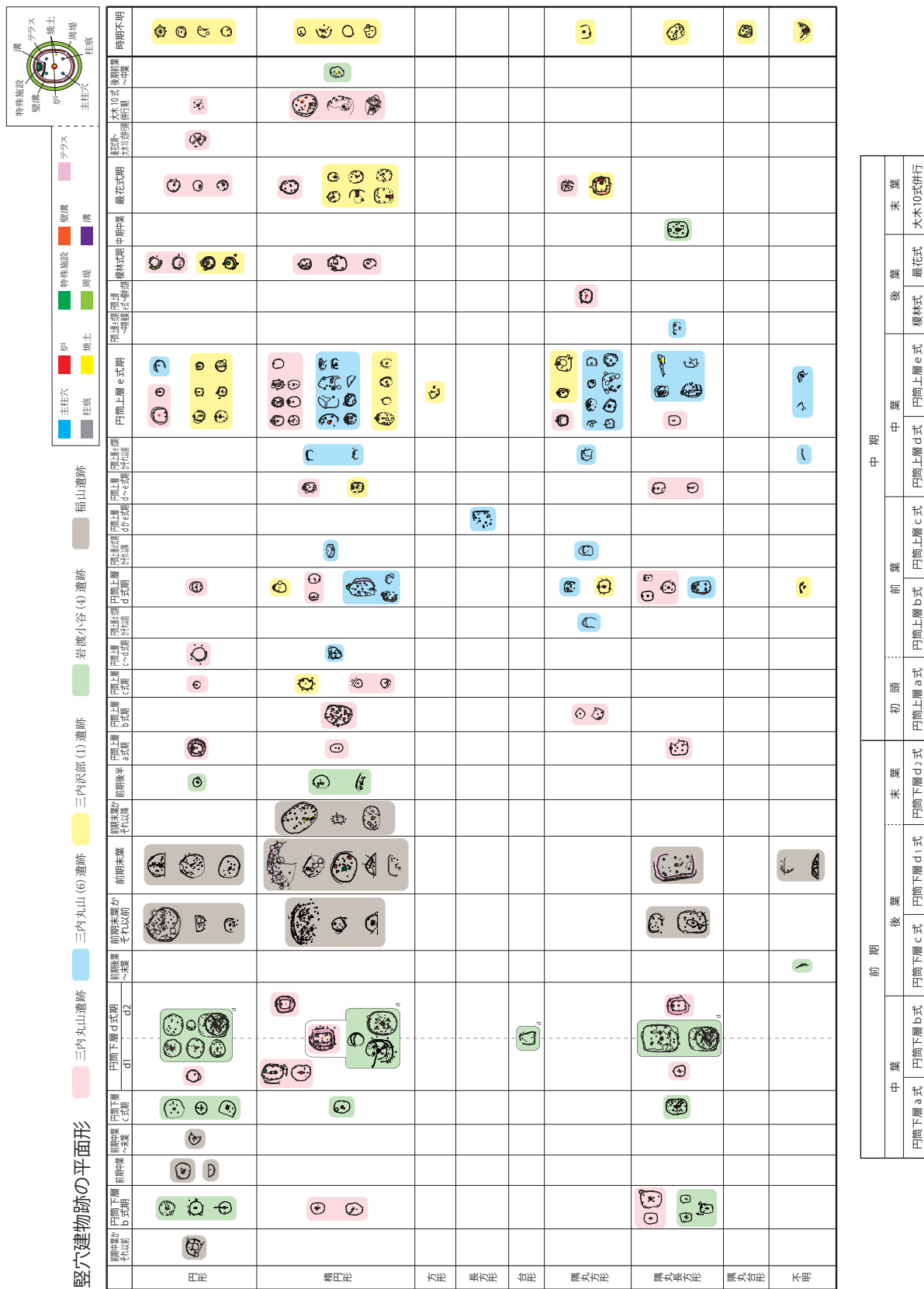


図3 竪穴建物跡の平面形

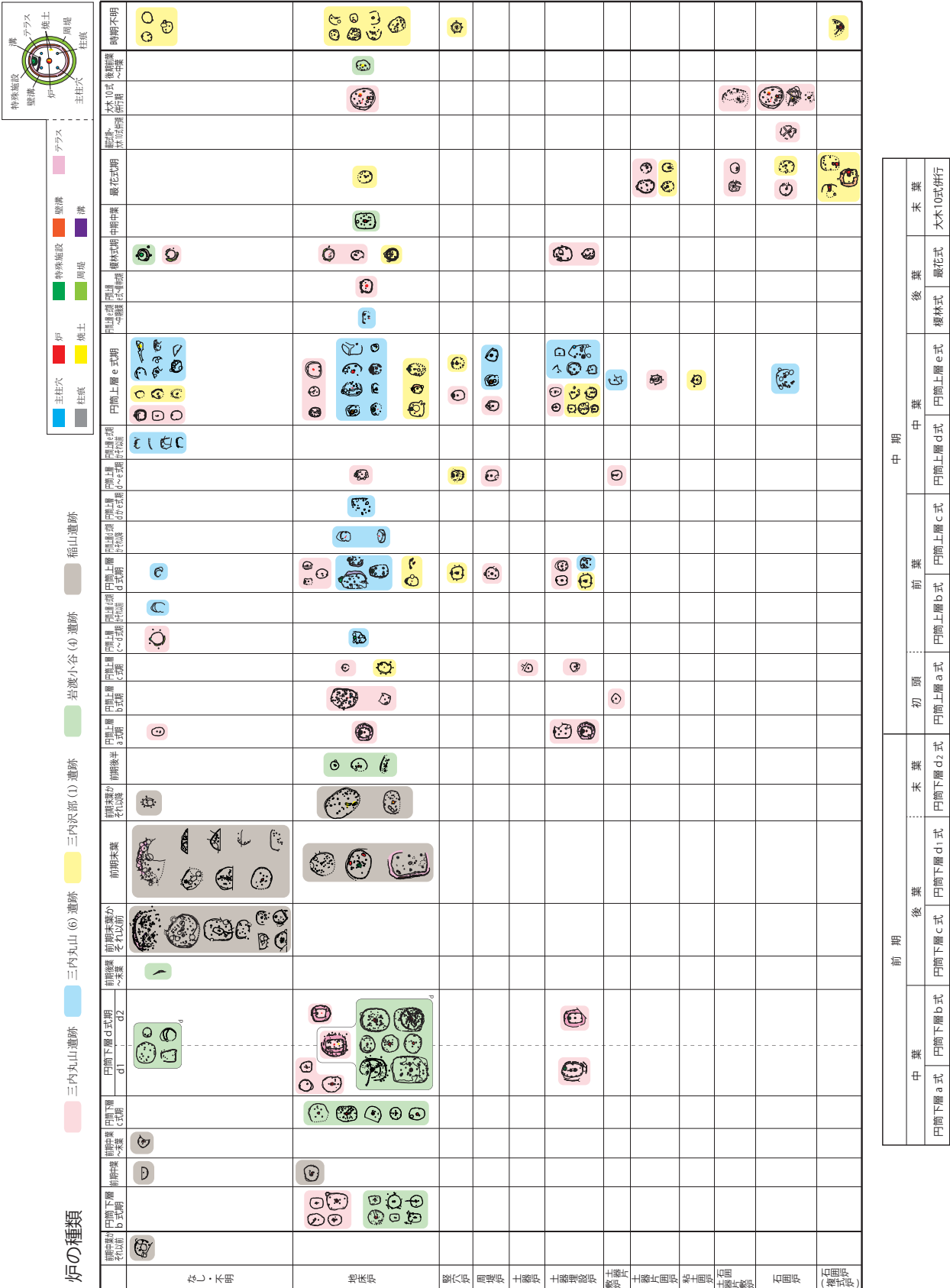


図4 竪穴建物跡の炉の種類



— 46 —

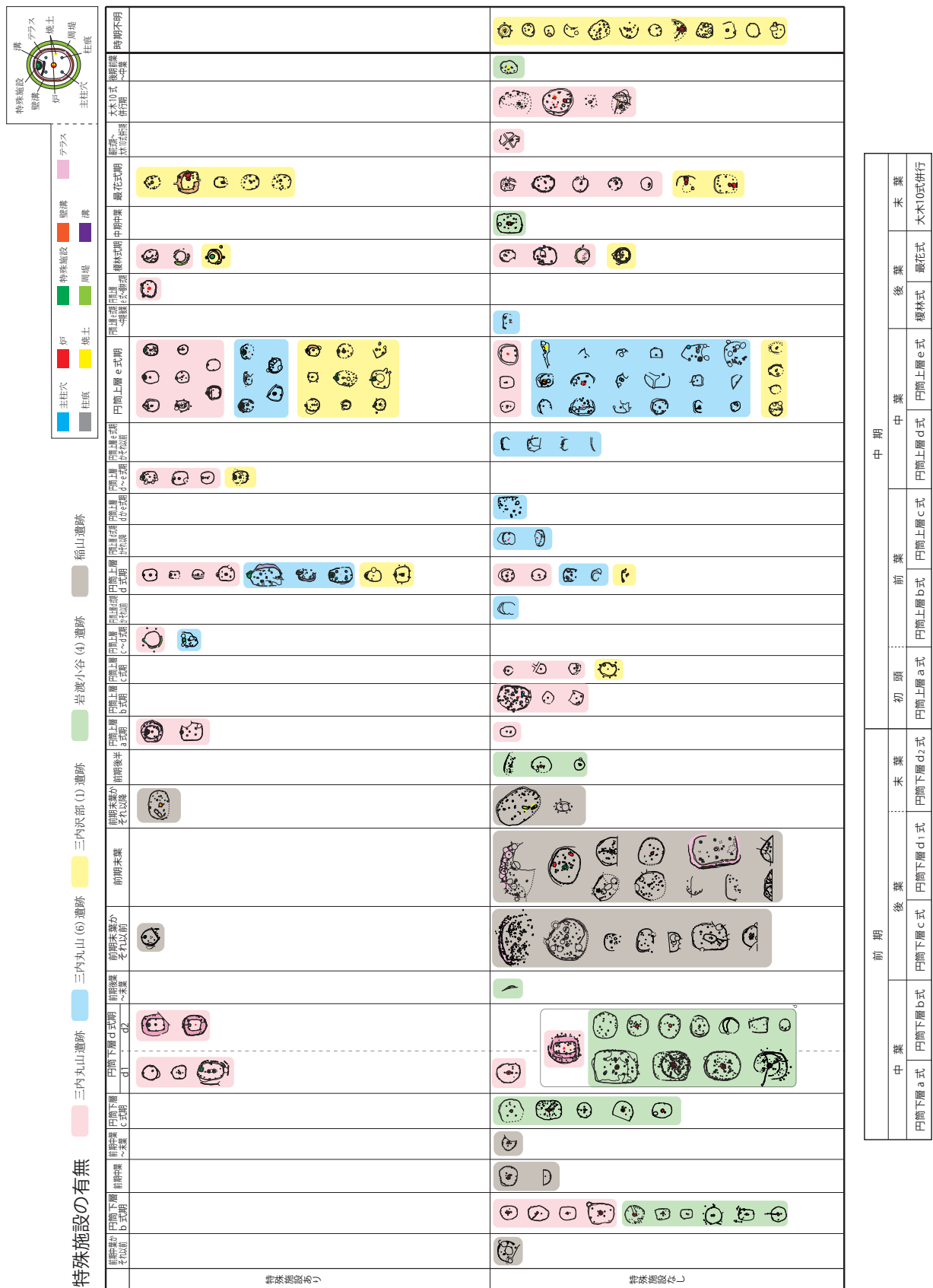


図6 竪穴建物跡の特殊施設の有無

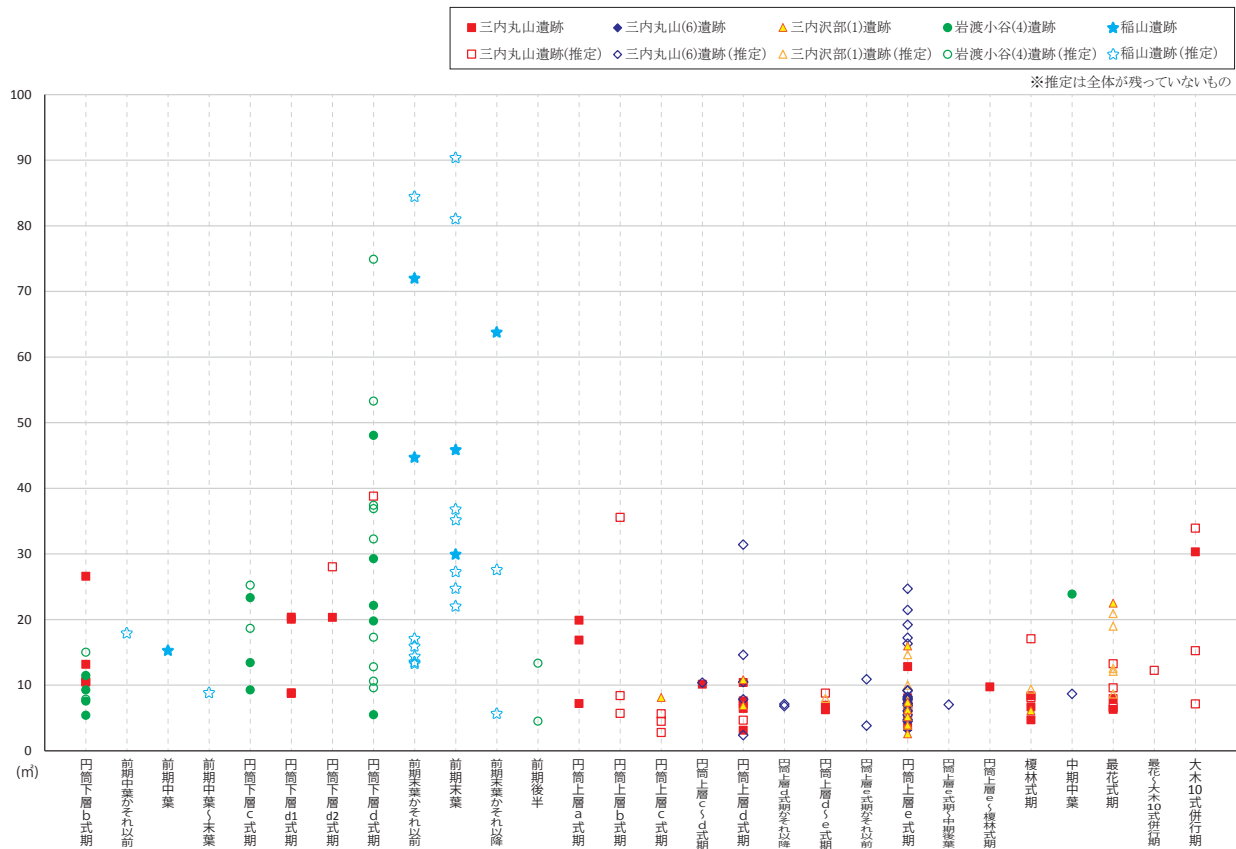


図7 縦穴建物跡の面積

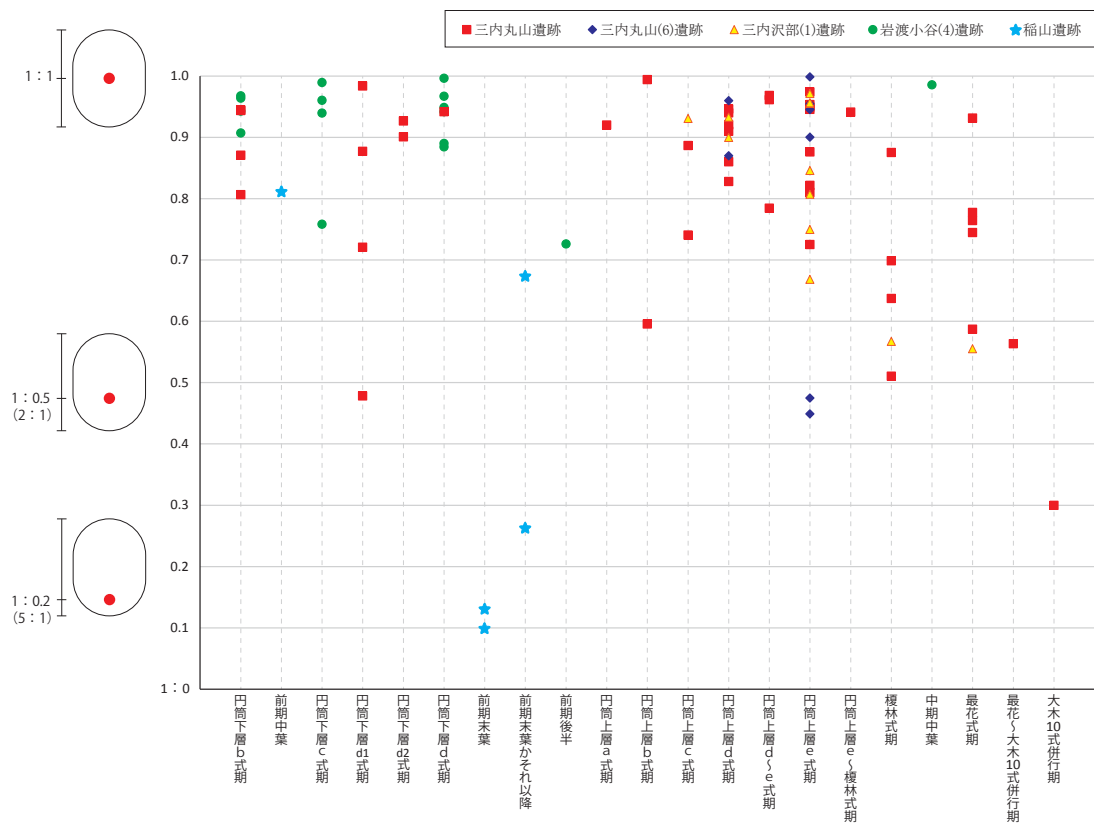


図8 縦穴建物跡の炉の位置

第5 日誌抄録

年 月 日	平成 29 年度の主なイベント
平成 29 年 5 月 3 日	縄文春祭りを開催（～5 月 5 日）
5 月 20 日	さんまる縄文学講座第 1 回「企画展 遺跡北端部の発掘～第 40 次調査最新情報展～」実施 （～11 月 18 日 9 回実施）
5 月 22 日	発掘調査開始（～10 月 27 日）
6 月 7 日	さんまる縄文体験第 1 回「遺跡を守ろう①！縄文の木を観察してプレートを作ろう」実施 （～10 月 14 日 1 日コース 4 回、2 日コース 2 回実施）
7 月 3 日	発掘調査現場公開開始（～9 月 15 日）
8 月 1 日	三内丸山遺跡見学者 800 万人達成
8 月 11 日	縄文夏祭りを開催（～8 月 12 日）
9 月 16 日	縄文大祭典を開催 発掘調査現地説明会を開催（～9 月 18 日）
9 月 16 日	企画展「磨製石斧の一生」を開催 （～平成 30 年 3 月 4 日）
9 月 17 日	さんまるジョモリンピックを開催
9 月 17 日	縄文秋祭りを開催（～9 月 18 日）
平成 30 年 2 月 10 日	縄文冬祭りを開催（～2 月 11 日）
3 月 10 日	遺跡報告会を開催

参考資料 1

「三内丸山遺跡保存・活用の取組方針」（平成30年2月 青森県教育委員会策定）

三内丸山遺跡の今後の保存・活用について

1 趣旨

平成6年に三内丸山遺跡の保存・活用が決定されてから、発掘調査や研究を継続するとともに遺跡の公開・活用に努めており、現在は、更なる展示・収蔵機能の充実を図るため、縄文時遊館に新たな展示・収蔵施設を増築整備している。

このような中で、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界文化遺産登録を見据え、その中核である三内丸山遺跡の更なる魅力づくりが求められていることから、三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会からの提言を踏まえた保存・活用の取組を平成30年度から実施するとともに、三内丸山遺跡を人類共通の財産として積極的に保存・活用し、次世代へ着実に継承していくため、有料化を実施する。

2 三内丸山遺跡保存・活用の取組方針

	取組方針	平成30年度の取組	平成31年度以降の方向性
縄文時遊館を 活用した取組	平成31年度本格オープン予定の 新展示・収蔵施設を活用した積極 的な情報発信及び縄文文化への関 心を高める体験学習等の充実。	・増築施設の公開準備及び一般公開（平成 30年11月）による周知広報。 ・新たな体験学習メニューの検討、試行。	・平成31年4月、企画展示・収蔵施設 の本格オープン。 ・魅力的な特別展の実施及び体験学習等 の充実。
縄文のむらの 風景づくりの 推進	復元建物等の適切な維持管理及び 最新の調査・研究成果を踏まえた 史跡の整備。	・有識者による史跡整備検討委員会を設置 し、環状配石墓等史跡の整備について検 討。	・復元建物等の適切な維持管理及び検討 結果を踏まえた史跡整備の実施。
来場者サービ スの充実	国や旅行形態など多様化する遺跡 見学者のニーズに応じた来場者サ ービスの充実。	・ITガイド等の改訂による外国人見学者 の受入機能の強化及び利便性向上。 ・県立美術館と連携した見学ルートの検討、 試行。	・来場者サービスの充実に向けた取組を 継続して実施。
管理運営体制 の充実	遺跡と縄文時遊館の効率的・効果 的な管理運営体制の構築及び遺跡 と縄文時遊館に有料化を導入。	・平成30年4月から遺跡を美術館から移 管し、遺跡と縄文時遊館を教育委員会が 一体的に管理。 ・有料化の実施に必要な設備等を整備。	・平成31年4月、三内丸山遺跡と縄 文時遊館を教育機関三内丸山遺跡セ ンターとして条例設置。 ・平成31年4月から有料化を実施。

3 教育機関の設置

遺跡と縄文時遊館の効率的・効果的な管理運営体制構築のため、新展示・収蔵施設が本格オープンする平成31年4月に遺跡と縄文時遊館を教育機関「三内丸山遺跡センター」として条例設置し、合わせて有料化を導入・実施する。

※有料化について

①有料化の範囲

遺跡と常設展示を併せて見学することが、遺跡の価値の理解に不可欠であることから、遺跡と縄文時遊館の全体を有料範囲とし、企画展示室で実施する特別展においては、企画内容に応じた観覧料を徴収する。

②料 金

	遺跡観覧料	特別展観覧料
一般	410円（330円）	特別展の内容に応じて、その都 度定める。
高校生・大学生等	200円（160円）	
中学生以下	無料	

※（ ）は20名以上の団体

参考資料 2

三内丸山遺跡の魅力づくりに関する報告書（概要版）

1 三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会からの提言の概要

（1）縄文時遊館の活用**① 縄文時遊館の展示室等を活用し、遺跡の価値の理解を促進するとともに積極的な情報発信を行う必要がある。**

- ・三内丸山遺跡の調査・研究の成果や、縄文遺跡群全体の価値や魅力を積極的に情報発信。
- ・展示の質の維持、向上を図り、魅力ある企画展を開催するため、予算や人員を確保。

② 縄文文化に対する関心を高めるための体験学習等の充実を図り、青森を理解し青森を発信できる人づくりに繋げる必要がある。

- ・大人向けや長期間かけて取り組むものやアクティブラーニングに対応したもの、縄文遺跡群を視野に入れたもの等。

（2）縄文のむらの風景づくりの推進**① 復元建物や覆屋等の適切な維持・管理が必要である。**

- ・特に大型掘立柱建物と大型竪穴住居については遺跡の顔であるので、可能な限り長期間活用。

② 遺跡の復元建物や植生等については、一層の整備充実が必要である。

- ・仮設展示室の撤去・地形復元や環状配石墓等の復元、縄文植物園の整備などの史跡の整備について検討。
- ・遺跡（野外）と展示室（屋内）を一体として、役割分担を意識した整備。

（3）来場者サービスの充実**① 見学者へのわかりやすい説明や情報提供を充実させる必要がある。**

- ・触れる展示（ハンズオン）や新たなデジタル技術の活用、多言語への対応等。

② 企画性に富んだ活用を充実させる必要がある。

- ・多様な見学プランや年間を通して核となるイベントの設定等。

③ 多様な遺跡見学者の受入環境を充実させる必要がある。

- ・外国人や家族連れ、学校の校外学習等。

④ 三内丸山遺跡を取り巻く環境の変化を踏まえ、遺跡へのアクセス等に関する対応が必要である。

- ・駅から遺跡までの散策コース（仮称「縄文の道」）、案内の多言語化等。

⑤ 他の遺跡等との連携が必要である。

- ・縄文遺跡群構成資産と連携、モデルコースの設定等。

(4) 管理運営体制の充実

① 効率的・効果的な管理運営体制について検討する必要がある。

- ・遺跡の一体的な管理体制。
- ・遺跡の管理に専門的な知識・技能の活用による効率化。

② 魅力づくりを進めていくためにも、有料化は避けて通れないであろう。

- ・企画展示室は、魅力的な企画展を実施していくために有料化。
- ・遺跡と縄文時遊館（レストラン・売店を除く）の有料化は、その範囲、時期、料金体系等を検討することが必要。

2 三内丸山遺跡における魅力づくりの確実な実行に向けて

当検討委員会では、三内丸山遺跡が我が国を代表する縄文遺跡として、これまで以上に国内外から多くの人々が訪れ、縄文の「むら」のたたずまいの中で、縄文文化を知り、体感し、親しむ姿を思い描きつつ検討を行い、提言をとりまとめた。

この提言を実行するためには、多くの時間と労力が必要と思われるので、着実に進めるために、優先順位を付けて年次計画を立てながら計画的に実行するとともに、魅力づくりを持続させるための体制を整備することが必要となる。

魅力づくりを持続させるために、有料化は避けられない課題だが、開設以来長く「無料」であったことも三内丸山遺跡の特色・魅力の一つであることは確かであり、有料化が一時的にせよ見学者数に影響を与えるであろうことも踏まえ、丁寧な説明と一層の魅力づくりへの努力が前提である。

また、三内丸山遺跡に対しては、その保存にあたり多くの県民の理解と支援があったばかりでなく、県民等からの寄付金を原資の一部として遺跡の保存・活用のための基金が設置されてきた、という経緯があり、それが「我々市民の遺跡」という意識につながっていることも尊重すべきであろう。

三内丸山遺跡は、世界遺産たるべき北海道・北東北の縄文遺跡群の中核として、その価値を発信し、構成資産である遺跡群の情報を統括する機能を果たしていくことが、その使命としてますます求められている。そして将来にわたり、三内丸山遺跡を訪れる人々の、考古学、歴史、文化への興味関心を喚起し、これまでの発掘調査や整理作業の中で得られた成果を踏まえて、特別史跡三内丸山遺跡の特徴をわかりやすく表現し、殊に縄文文化の価値や魅力の理解に資するような取り組みが、着実に推進されることを期待するものである。

参考資料 3

三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会設置要綱

(趣旨)

第1 世界遺産登録を見据え、三内丸山遺跡の更なる魅力づくりについて検討するため、三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2 委員会は、8名の委員で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから、教育長が委嘱する。

(1) 文化財保護専門家、青森県文化財保護審議会委員、旅行業団体関係者

(2) 青森商工会議所、一般社団法人三内丸山応援隊、NPO 法人三内丸山縄文発信の会及び青森県小学校長会が推薦する者

3 委員会に委員長及び委員長代理各1人を置く。

4 委員長及び委員長代理は、委員の互選により定める。

5 委員長は、会議を主宰する。

6 委員長代理は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(任期)

第3 委員の任期は、委嘱した日から平成30年3月31日までとする。ただし、各委員が欠けた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残存期間とする。

(会議)

第4 委員会は、教育長が招集する。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

4 委員長は、必要があるときは、委員以外の者の出席を求めて意見を聞くことができる。

(庶務)

第5 委員会の庶務は、青森県教育庁文化財保護課において処理する。

(その他)

第6 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営等に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成28年11月8日から施行する。

(三内丸山遺跡魅力づくり検討委員会委員名簿)

(平成29年10月現在)

所 属	氏 名	現（元）職
委 員 長	菊 池 徹 夫	早稲田大学名誉教授 福島県文化財センター白河館館長 縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員長
委員長代理	工 藤 竹 久	県文化財保護審議会委員史跡担当 元八戸市博物館館長
委 員	岡 田 康 博	県企画政策部理事（世界文化遺産登録推進室長）
委 員	若 井 敬一郎	青森商工会議所会頭
委 員	小 松 智	日本旅行業協会東北支部青森地区委員会委員長 株式会社近畿日本ツーリスト東北青森支店長
委 員	一町田 工	一般社団法人三内丸山応援隊 代表理事
委 員	菊 池 正 浩	NPO 法人三内丸山縄文発信の会 副理事長
委 員	小 形 浩 子	青森県小学校長会対策部副部長 青森市立戸山西小学校校長

特別史跡三内丸山遺跡

年 報

— 22 —

発行日	平成 31 年 3 月 8 日
発 行	青森県教育委員会
編 集	青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室 〒030-8540 青森市長島一丁目 1 - 1 TEL 017-734-9924 FAX 017-734-8280
	三内丸山遺跡保存活用推進室 (縄文時遊館) 〒038-0031 青森市三内字丸山305 TEL 017-781-6078 FAX 017-781-6103
印刷所	ワタナベサービス株式会社 〒030-0803 青森市安方 2 丁目17- 3 TEL 017-777-1388 FAX 017-735-5982